

研

究

紀

要

第

31

号

青森県内における縄文中期の大木系壺形土器について	1
永瀬 史人（新潟県立歴史博物館）	
秦 光次郎（青森県埋蔵文化財調査センター）	
長谷川大旗（青森県埋蔵文化財調査センター）	
近野遺跡の未報告資料の再報告	13
長谷川大旗（青森県埋蔵文化財調査センター）	
山地 雄大（青森県教育庁文化財保護課）	
高橋 哲（青森県埋蔵文化財調査センター）	
青森県における縄文時代後期土器の年代測定（2）	29
小林 謙一（中央大学）	
佐藤 智生（青森県埋蔵文化財調査センター）	
相原 淳一（宮城県考古学会）	
考古資料の普及・活用	43
木村 高（青森県埋蔵文化財調査センター）	
赤色塗彩された円筒下層式土器 —大鰐町大平遺跡の未報告資料—	59
岡本 洋（青森県埋蔵文化財調査センター）	

2026.3

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県内における縄文中期の大木系壺形土器について

永瀬 史人*・秦 光次郎**・長谷川大旗**

はじめに

本稿は、青森県埋蔵文化財調査センターが過去に発掘調査を実施し、既に報告書も刊行されている遺跡の中で未報告となっていた壺形土器、及び、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の収蔵資料として保管されていた同種の未報告資料を計測し、併せて報告するものである。

1点目(以下、資料1)は、六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡の資料である。報告書は平成4年度(1992)までに全て刊行され、出土遺物は六ヶ所村に譲与されているが、一部、青森県埋蔵文化財調査センターで保管されている土器があり、その一つが資料1である。この資料は、出土状況が明確であると共にほぼ完存した優品であるが、未報告となっていた。

2点目(以下、資料2)は、東津軽郡外ヶ浜町中の平遺跡より出土した資料である。多量の土器が盛土中から出土したことを契機として土器編年や廃棄パターンが提起された遺跡として著名であり(青森県教育委員会1973a・b・1975)、青森県埋蔵文化財調査センターでその再整理作業を進めている中で新たに発見された。

3点目(以下、資料3)は、国立歴史民俗博物館が所蔵する資料である。同館では五戸町「大窪遺跡」として登録されているが、現在の埋蔵文化財包蔵地名は「大久保遺跡」に変更されている。

当資料は、かつて、個人収集家の田中忠三郎が所有していたもので、その後、国立歴史民俗博物館に移譲された。

いずれも、縄文時代中期後葉の「大木8b式土器」に該当するものであり、青森県内で出土するその考古学的な背景を考察する上でも重要な資料といえる。そこで、以下ではこれらの3次元計測を実施して報告を行うと共に、当該期の大木系壺形土器をめぐる課題について若干の検討を加えたい。執筆は、1・3章を永瀬、2章を永瀬、秦、長谷川が担当した。

1 資料の計測方法

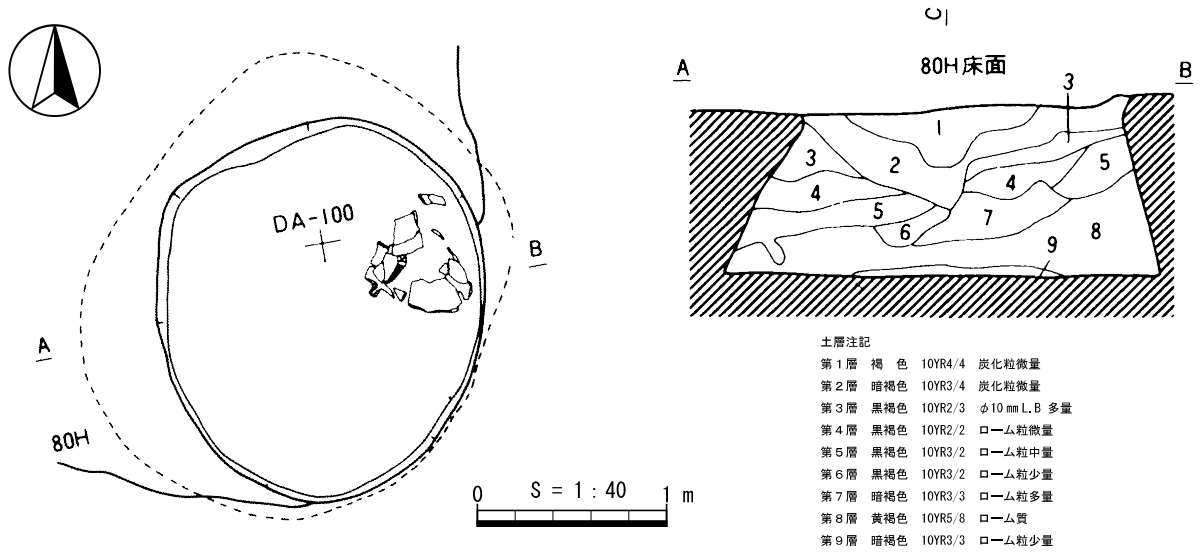
3点の未報告資料の調査、報告にあたっては、フォトグラメトリによる3次元計測を実施した。富ノ沢(2)遺跡、大久保遺跡の資料については、永瀬が所蔵先の青森県埋蔵文化財調査センター、国立歴史民俗博物館でそれぞれ写真撮影を行い、資料1は株式会社ラングにPEAKITの作成を依頼した。資料3については、資料2と共に『遺物くん』(Cubic社)を用いてオルソ画像を作成し、これを下図として1側面を長谷川がトレースした。3次元計測に要した撮影枚数は、資料1が586枚、資料2が318枚、資料3が809枚である¹⁾。

2 壺形土器の報告

(1) - 1. 富ノ沢(2)遺跡の概要

富ノ沢(2)遺跡は、青森県上北郡六ヶ所村大字尾駸字上尾駸に所在する。尾駸沼と老部川に挟まれた台地上、標高50~66mの地点に立地している。東側の台地には富ノ沢(1)遺跡、西側の台地には富ノ沢(3)遺跡がある。この他にも、周辺には十腰内式期の配石遺構や多数の土器が出土した大

* 新潟県立歴史博物館 ** 青森県埋蔵文化財調査センター



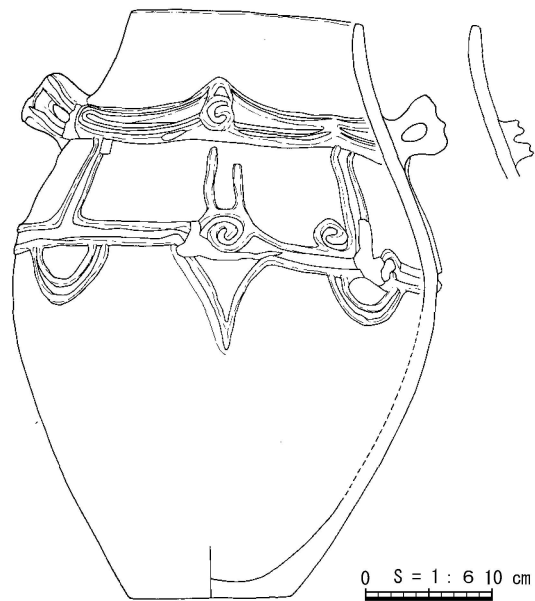
第1図 富ノ沢(2)遺跡 149号土坑平面図・断面図 (青森県教育委員会 1993)



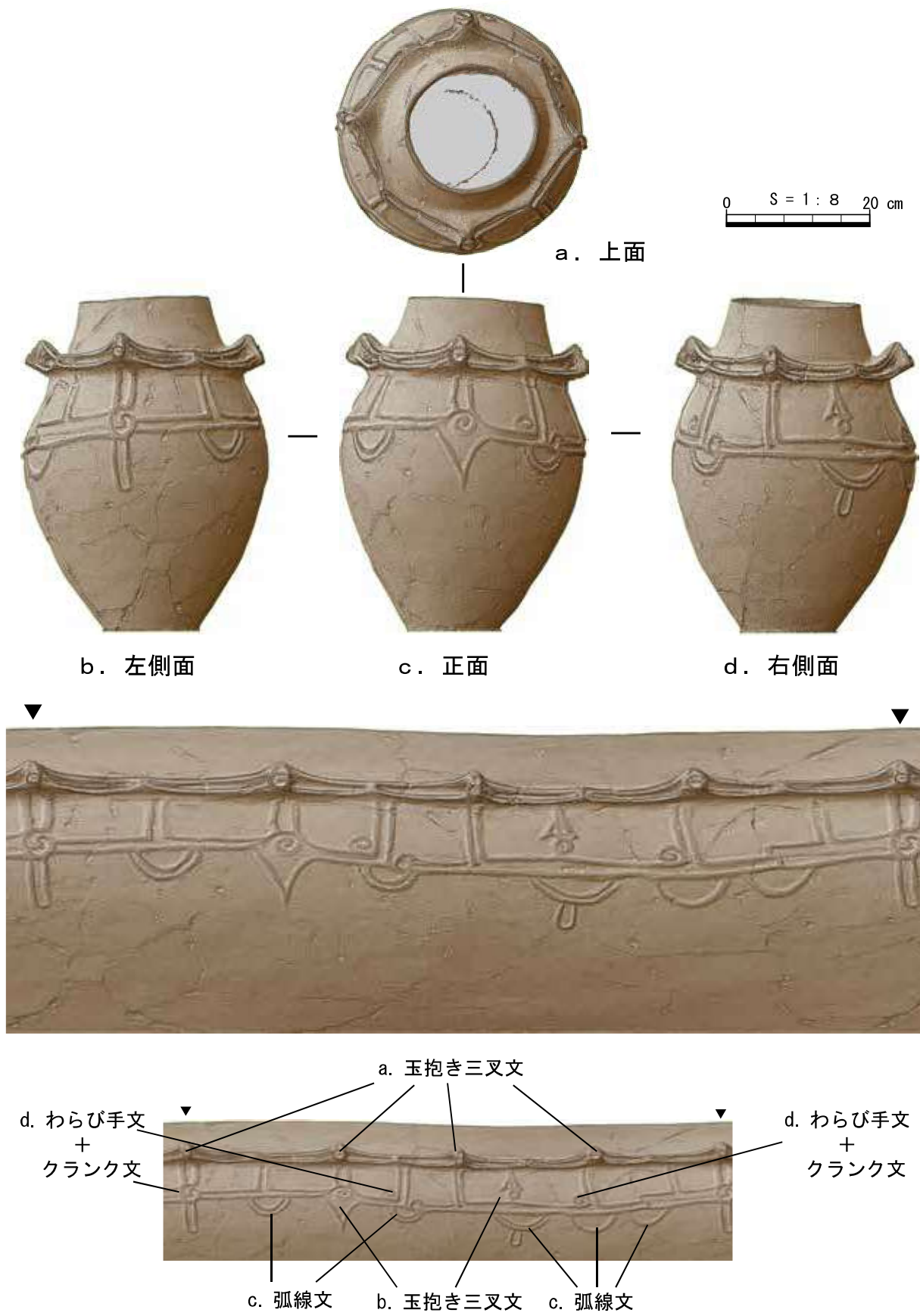
写真1(左)・2(右) 149号土坑壺形土器出土状況 (南から撮影)



写真3 壺形土器 (資料1)



第2図 壺形土器 (資料1) 実測図



第 3 図 PEAKIT による 4 面展開図・带状展開図

石平遺跡や、弥栄平（1）遺跡など著名な遺跡が点在しており、北東北の縄文文化を考える上で注目すべき地域である。当遺跡は、昭和62年（1982）から平成2年（1990）にかけて約40,000㎡にも及ぶ範囲が調査されており、調査された地区ごとにA区・B区・C区に分かれている。C区からは、縄文時代中期末葉～後期初頭期の建物跡が多数発見され、当該期の集落の様相を確認できる重要な遺跡の一つとなっている。A区は、調査区の中でもとりわけ多数の遺構が見つかり、竪穴建物跡405軒、掘立柱建物跡9棟、配石遺構4基、土坑698基、埋設土器2基などが確認されている。

（1）－2．富ノ沢（2）遺跡出土の壺形土器（資料1、第1～3図、写真1～3）

資料1は、このA区東側、「D地区」と呼称されるエリア内の149号土坑より出土している（第1図）。

149号土坑は、全体の形状がフラスコ状を呈しており、開口部が193cm×168cm、坑底部が231cm×202cm、深さが88cmと比較的規模が大きい。この土坑は、中期後葉の最花式期とみられる80号竪穴建物跡（80H）の直下より発見されており（第1図）、時間的にはそれよりも古い。堆積土は9層に分層され、1・2・9層は自然堆積とみるが、3層から8層にかけては不自然な堆積が認められることから、人為堆積の可能性が高い。

資料1は、坑内の東寄り、底面より若干浮いた高さに横倒しの状態で発見されている（第1図・写真1）。よく観察すると、口縁部から胴部上半部にかけて上面の土器片が大きく割れている一方で、下半部は内部に土が充満し、潰れずに壊れる前の形状を良く留めている。この状況は、土器が投棄されたというよりもむしろ、坑底面に正立した状態にあったことを示唆しており、坑内に土が充填される際に土器内部にも入り込み、その重みで横方向に倒れた可能性が推測される。

寸法は、口径17.9cm、器高44cm、底径12cm、胴部最大径33cmである（第3図）。ほぼ完存しており、重量は6.9kg（一部石膏部分を含む）を計る。頸部に鏝をもつこの種の土器は、鏝付近に孔が穿たれていれば中部や関東地方の勝坂式土器に伴う「有孔鏝付土器」とほぼ同形態である（阿部2008）が、鏝の部分に装飾としての把手が付けられている点をはじめとして壺の系譜の中で成立した器形と考えられる。

この土器を大きく特徴づけるのは、外部に大きく突出した鏝とその把手である。鏝は、2条の隆帯を頸部にめぐらせ、それを繋ぎ合わせるように橋状把手が4単位、小突起が4単位ずつ交互に付されている。鏝の部分の上面観は八角形となり（第3図a）、美的効果も優れている。

鏝状の隆帯には深い沈線、橋状把手には粘土紐の貼付と沈線によっていわゆる「玉抱き三叉文（剣先付き渦巻文）」が施されている。橋状把手と小突起を基準として、胴部には2本に並行する断面カマボコ状の隆帯でクランク状・十字状の区画文、弧線文、わらび手文、玉抱き三叉文などが描かれている。4面展開図と帯状展開図から解るように、文様パターンは単調ではなく、それぞれの面でその顔つきは異なっている。色調は、マンセル記号では10YR8/3の浅黄橙色である。胎土には砂粒が多く含まれており、粒径1mmから2mmの赤色礫、黒色礫が目立つ。内外面共に丁寧に調整されており、内部には縦方向のミガキ痕が顕著である。胴部中位に黒斑があるが二次的に被熱した痕跡はなく、煮沸とは異なる機能を有していたことは確かである。同種の壺形土器には赤色顔料が塗彩される例があるが、この資料については肉眼では認められなかった。

（1）－3．資料1の出土状況について

貯蔵穴としても用いられるフラスコ状土坑と、貯蔵容器としての機能を有する壺形土器の組み合わせは、一見、149号土坑が貯蔵に関わるものであることを想起させるが、人為によって廃絶されたと

すればその状況は不自然といえる。深浦町津山遺跡30号土坑より、大木7a式の完形の浅鉢形土器と精巧に作られた小型の脚付壺形土器がセットとして発見されている(青森県教育委員会1994)が、このような事例も貯蔵とは異なる状況を示唆している。

中期後葉までの同様の形態をもつ土器は、むしろ竪穴建物跡や捨て場から発見される例が多いことから、ほぼ完形の壺形土器が土坑から出土した背景には特殊な機能との関わりも想起される。北東北と北海道の再葬土器棺墓を集成した葛西勳は、本例の壺形土器を含むフラスコ状土坑出土例を取り上げ、「再葬土器棺墓の類似遺構」として扱っており(葛西2002)、注目される。

(2) - 1. 中の平遺跡の概要

中の平遺跡は、青森県東津軽郡外ヶ浜町(旧三厩村)宇鉄字中の平12番地に位置する²⁾。遺跡は、外ヶ浜町役場三厩支所から北西に約4.5km、津軽半島北端の三厩湾の西側、元宇鉄川北岸の標高約25mの段丘にある。遺跡からは東方には北半島を、北方には北海道を望む。中の平遺跡の南側の沢を挟んだ対岸には、宇鉄遺跡が隣接する。

中の平遺跡は、本州と北海道をつなぐ海底鉄道トンネルである青函トンネルの工事専用道路建設に伴い発掘調査された。発掘調査は昭和47・48年(1972・1973)の2か年にわたり青森県教育委員会が実施した。第一次調査では土器30箱、第二次調査では200箱もの遺物が出土した。これは、当時では青森県内における発掘調査の遺物出土量で最多であった(青森県教育委員会1973a・b・1975)。遺物は青森県埋蔵文化財調査センターに所蔵され、現在再整理を実施している(青森県埋蔵文化財調査センター2025)。

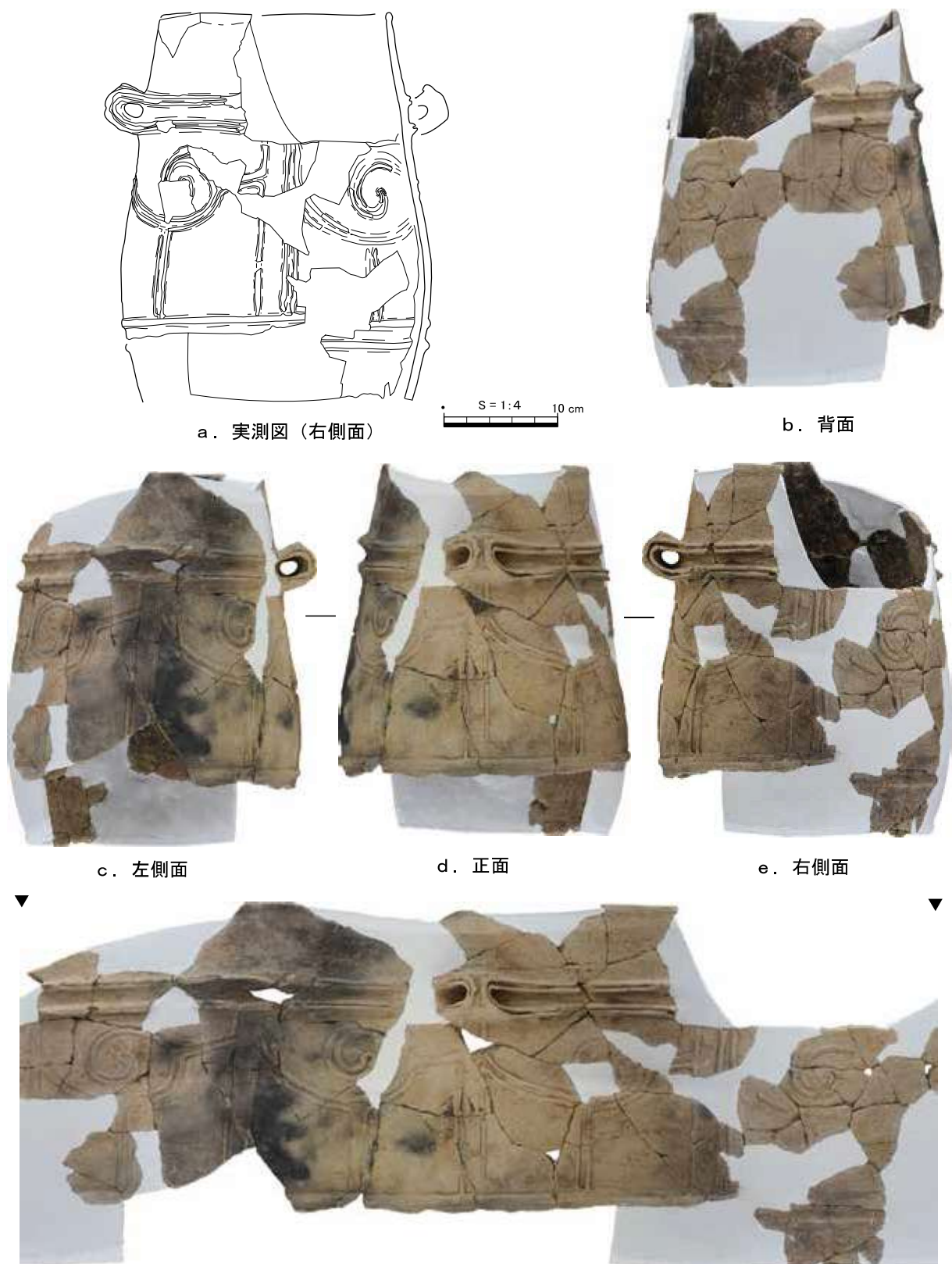
発掘調査では、縄文時代前期から後期前半の遺物が出土した。遺構は竪穴建物跡1基、集石遺構1基、大型の方形配石炉遺構1基が検出された。特筆すべきは厚さ3mにも及ぶ遺物包含層(盛土遺構)である。時期は、前期後葉(円筒下層d1式)から後期前葉(十腰内I式新段階)にわたる。4つの文化層に大別され、第I文化層は十腰内I式、第II文化層は最花式～榎林式、第III文化層は円筒上層e～a式、第IV文化層は円筒下層d式の土器が包含される。これらの出土状況等から、報告者の鈴木克彦は中期後半の土器編年を構築した。中の平I式→榎林式→中の平II式→中の平III式の編年序列とし、榎林式、中の平II・III式に大木8b～10式土器が併行するとし、これは現在においても中期後半編年の基礎とされる(小保内2008)。また、盛土遺構の土器出土状況を分類し、一定の場所に多量の土器が廃棄されているものを中の平(A)パターン、円筒土器文化における直立・倒立状態の出土状況を中の平(B)パターンとした(青森県教育委員会1975)。

以上の成果から、中の平遺跡は津軽半島の前期後葉から後期前葉にわたる拠点集落に位置づけられる。立地から北海道と北東北をつなぐ集落としても重要である。また、土器編年研究や土器出土状況などの研究史において現在にいたる研究の基礎となる遺跡といえる。

(2) - 2. 中の平遺跡出土の壺形土器 (資料2、第4図)

中の平遺跡から出土した資料2(第4図)は、発掘調査報告書には掲載されておらず、前述の再整理で検出した。第二次調査の出土遺物で、H-11グリッドの遺物包含層(盛土遺構)、II層から出土した。

土器は、口縁部から胴部下半が残存する大型壺である。寸法は、口径が復元値で20.0cm、器高が残存値で34.8cm、最大径が胴部下部で27.0cmである。器形は最大径の胴部下半から口縁部にわたって緩くすぼむ。口縁部は平口縁で無文である。頸部には、2条の鐮状の隆帯が付き、4単位で橋状把手が付属する。隆帯上には深い沈線が施文され、橋状把手上で連結する楕円状になる。胴部下半には2



第4図 中の平遺跡出土壺形土器 (資料2)

条の隆帯が付く。文様は胴部にあり、2条の細い粘土紐を貼付けて施文される。単位は均整のとれた4単位で、把手から下に延びる垂線により四角形に区画される。区画内には、左から横に延びる渦巻文が配置される。渦巻文から左・下に連結する。胎土は均質な粘土で、赤褐色の凝灰岩礫が少量混入する。色調はマンセル記号で外面が10YR7/6明黄褐色、内面は煤の付着していない部分で10YR6/4にぶい黄橙色である。調整は内外面ともにミガキである。外面には黒斑、内面には煤が付着しており、土器焼成時のものと思われる。

(3)－1. 大久保遺跡の概要

大久保遺跡(遺跡番号:442019)は、東西に流れる五戸川左岸の丘陵上に立地する。住所は五戸町字大久保である。国立歴史民俗博物館では「大窪遺跡」として登録されている。昭和42年(1967)に発行された『全国遺跡地図(青森県)』(文化財保護委員会1968)を参照すると、『大窪遺跡』名で五戸町大字切谷内字大窪を所在地として登録されており(遺跡番号962)、昭和63年(1988)に、現在の遺跡名と住所に変更されている。なお、この遺跡地図と同年に発行されている『五戸町誌(上巻)』(青森県五戸町1967)では、小字名が「内大窪」と表記されており、その後の青森県教育委員会で刊行されている埋蔵文化財調査報告書でも遺跡名が「内大窪」と記載されている例が見受けられる(青森県教育委員会1976など)。

大久保遺跡は、「散布地」として登録されているようにその詳細は不明であり、学術、行政共にこれまでに発掘調査が実施されたことはないが、田中忠三郎の収集による同遺跡出土とみられる資料が多数流通しており、今回報告する資料もその内の1個体である。

(3)－2. 大久保遺跡出土の壺形土器(資料3、第5図)

資料3は、欠損が一部のみで遺存状態は比較的に良好である。寸法は、口径20cm、底径11.5cm、器高が55.5cm、胴部最大径が34.8cmであり、資料2と同様に、同種の土器の中でも大型のサイズといえる。重量は8.1kgを計る。器形は胴部が大きく張り出して頸部に向かって緩やかにすぼまり、口縁部は内傾しながら直線的に立ち上がる。平縁の無文口縁で口唇部が玉縁状に肥厚する。頸部には4単位の橋状把手が付き、それぞれを連結するように2条の鏢状の隆帯がめぐり、橋状把手から隆帯にかけて沈線による小わらび手文が施され、隆帯上のわらび手部分は突起となり、外側に突き出ている。胴部は、2本の並行する隆帯で器面が縦位に4分割され、それぞれの区画内に渦巻文、玉抱き三叉文(剣先文付き渦巻文)、わらび手文が連結するように描かれている。第5図の展開図にみるように、区画内には同一の文様パターンはみられず、それぞれの面で顔つきが異なっている。隆帯は断面がカマボコ状で、隆帯脇に沈線によるナゾリが加えられ、いわゆる「隆沈線」を構成する。内外面共に被熱した痕跡は認められないが、内面は全体に黒褐色を呈し、爆ぜたように各所に剥離痕が確認される。赤色に塗彩された痕跡はなく、外面の色調は7.5YR7/4(にぶい橙色)である。底部はナデ調整が加えられており、無文である。胎土については、粒径2～5mmの白色礫が多数含まれている。

(4) 小結

以上、3点の未報告資料の特徴を出土遺跡の概要と併せて記述してきた。観察を通じて得られた所見を簡潔にまとめると、次のようになる。

- ① 施文手法として、隆帯のみの場合、もしくは、隆帯と隆帯脇に沿って施される沈線、「隆沈線」が用いられている。
- ② 4単位の橋状把手のほか、文様は、渦巻文、玉抱き三叉文(剣先付きの渦巻文)を主体とする。



第5図 大久保遺跡出土壺形土器 (資料3)

これらは、隆帯もしくは、「隆沈線」を施文手法としている点、渦巻文を主文様に用いている点、円筒上層式からは派生しえない器形である点を考慮すれば、大木式土器文化圏から此地にもたらされた搬入品と考えられる。

以下では、その評価をめぐる先行研究との比較や、青森県内における壺形土器の変遷過程についての私見を述べておきたい。

3. 大木系壺形土器をめぐる二、三の論点

(1) 搬入・在地製作の問題

これらの壺形土器が、青森県内では異系統に当たる「大木 8b 式」である点は重要な論点の一つであり、大木式土器の文化圏から当地にもたらされたものか、または在地で製作されたもので中期榎林式土器文化に対する評価は変わる。

鈴木克彦は、青森県内より出土している当該期の壺形土器は、一様に「搬入品」と扱っている(鈴木 1998)。一方で、小保内裕之は、八戸市松ヶ崎遺跡より出土した大木系の深鉢・浅鉢・壺などを「在地」で製作されたものと捉え、大木式の影響を受けて成立した榎林式土器の器種組成にこれらを含めている(小保内 2008)。両氏の見方は大きく異なるが、その背景にはおそらく、青森県特有の地域性が関係している。例えば南部地域の遺跡では、大木式土器の器種を構成する浅鉢、器台なども比較的によく確認できるが、津軽地域では、膨大な土器出土量を誇る三内丸山遺跡でも大木 8b 式の浅鉢は稀である(第 7 図)。八戸周辺のように大木式土器文化圏と近接し、忠実な模倣製作を可能とするほどの交流頻度や、あるいは大木式土器文化圏からの移住者の存在が推測される地域であれば、「大木式の在地製作」も想定が可能かもしれないが、津軽地域では、胎土・施文手法・文様からその多くが大木 8b 式土器の「搬入品」と判断され、模倣製作は少ないとみる³⁾。前段階の円筒上層 d・e 式と同様に元々器種のヴァリエティが少ない榎林式土器文化では⁴⁾、それを外部から搬入していたと考える。資料 1～3 のような事例が各地で発見されることが示唆するように、とりわけ壺形土器の需要がもっとも高かったとみられ、道南の函館市大船遺跡においても搬入品が出土している(永瀬 2015)。榎林式土器分布圏で壺形土器が希求された背景には、土器そのものの「交換財」としての価値か、もしくはそれに納められた内容物が関係していたかもしれない。

(2) 壺形土器の変遷について

壺形土器の自家生産が主流となった画期は、最花式土器段階である。榎林式土器から最花式土器へと変化していく中で最も大きな特徴は、口縁部文様帯が消失し、胴部に主文様が移行していく点である。大木 8b 式後半以降、口縁部文様帯が消失して胴部文様が主体となる傾向は東日本の広域に認められるが、無文口縁と胴部文様で構成される最花式土器の成立には、大木系壺形土器の影響もあるとみている。最花式に固有の「広口壺」(青森県教育委員会 1976)、もしくは「壺 B」(小保内 2008)は、器形としては正に壺形のカテゴリーに含まれるといえ、大木 8b 式の壺のプロポーシオンと類似する。階上町野場(5)遺跡(青森県教育委員会 1993)で出土している壺形土器(写真 4 前列右、第 6 図)は、最花式「広口壺」(写真 4 前列左)と橋状把手の有無など一部の相違が認められる程度でほぼ同形態である。さらに、最花式段階では精製土器と粗製土器に分化していく片鱗が認められ、薄手の造形で光沢が出るほどに口縁部を磨いたり、赤色の塗彩を施す「広口壺」も現れるなど、後代でみられるような「壺」としての機能も



写真4 最花式土器（前列左）と壺形土器（前列右）（青森県教育委員会 1993）



第6図 中期後葉～末葉期の壺形土器の変遷

＜器種組成の変化からみた画期＞	在地器種								異系統土器器種								土器型式	
	土器型式	器種			付帯属性					津軽地域				南部地域				
		浅鉢（類）	壺形	器台	精製土器※1	赤色塗彩	漆付着	折衷土器	深鉢	浅鉢（類）	壺形	器台	深鉢	浅鉢（類）	壺形	器台		
stage1 ・前末型土器様相の変容	円筒上層 a 式	●	×	×	×	×	×	×	●	△	△?	×	●	×	×	×	大木7a式 新保・新崎式	
stage2 ・在型浅鉢の減少・消失 ・大木式土器の積極的受容	円筒上層 b 式	●	×	×	×	×	×	×	△	△	×	×	●	●	×	×	大木7b式 新崎Ⅱ式	
	円筒上層 c 式	●	×	×	×	×	△	×	●	●	△	△	◎	●	●	×	大木8a式	
stage3 ・大木系文様への転換 ・壺形の積極的受容	円筒上層 d 式	△	×	×	×	×	×	△	●	●	△	△	◎	●	●	×	大木8a式	
	円筒上層 e 式	×	×	×	×	×	×	●	●	△	△	△	◎	◎	◎	△	大木8b式	
stage4 ・精製土器としての壺形の在り製作	上層e式／榎林1式	×	×	×	×	×	×	◎	●	△	△	△	◎	◎	◎	△	大木8b式	
	榎林式	△?	△?	×	△	△	△	※3	△	×	△	△	◎	◎	◎	△	大木9式	
	大木10式併行	×	◎	×	●	◎	●	※3	△	×	△	×	●	●	●	×	大木10式 称名寺式	

凡例：◎多い ●みられる △少ない *なし（未確認）

※1)ここでいう精製土器は、「壺」というカテゴリーの中で、細かなミガキなど、調整が非常に丁寧なもの、あるいは比較的薄手で堅緻なつくりの土器を指す。

※2)「◎」は、最花式のいわゆる「広口壺」（『三内澤部』1976）、「壺B」（小保内2008）を、深鉢ではなく壺形として定義した場合である。

※3)榎林式と大木10式併行段階の土器は、元々大木式の要素が色濃く反映されていることから折衷としての認定は難しい。

（検討対象遺跡） 三内丸山・三内丸山(6)・三内沢部・山崎・中の平・野場(3)・猫又(2)・田代・新田・松ヶ崎・富ノ沢(2)・泉山・津山・ニツ森貝塚・水上(2)・上蛇沢・餅ノ沢

第7図 青森県内の縄文中期における土器型式と器種組成の変化、異系統土器の伴出状況

有するようになる。ただし、「広口壺」は煮沸にもよく供されることから、器種による使い分けがまだ確立されていない段階といえる。

大木10式併行段階になると、壺形土器は器種の中でもより主体的になり（鈴木 1998）、比較的に小型のものから大型に至るまで数多く製作されるようになる。頸部に橋状把手が付き、鏝状隆帯がめぐると、沈線のみで頸部を区画するものがあるが、双方共に最花式段階からスムーズに移行するとみられる（第6図）。

壺形の器形を採用する例では、薄手で調整が精緻なものも多い。

第7図は、青森県内における円筒上層式から中期末葉までの器種組成の変化と漆をはじめとする赤色塗彩の傾向、及び津軽地域、南部地域毎に大木式土器を主とした異系統土器(大木7a式段階については新保・新崎式土器も含む)の出土量を器種別に記号でまとめたものである。土器様相や器種組成の変化には少なくとも4段階の画期が認められ、これをStage1～4とした。

Stage1は、前期末葉の円筒下層d式から続く深鉢と浅鉢の器種組成は保持されるが、大木7b式の流入が目立つようになり、深鉢の口縁部に大柄の台形突起が付くようになる。Stage2の円筒上層d式以降では、円筒上層c式まで継承されていた浅鉢が希少となる。Stage3では、大木8b式の壺形土器が多数受容されると共に土器全体が大木系の文様構成に転換する。Stage4の最花式以降になると、精製としての壺形土器がドメスティックに生産されるようになり、壺が主要器種の一つとなる。

(3) 後期初頭の再葬土器棺との接点

後期初頭以降、北東北を中心に普及する再葬用の壺形土器棺との関係はどのように考えられるだろうか。青森市山野峠遺跡から出土した、狩猟文が描かれた土器棺が現時点では最古段階(牛ヶ沢(3)式)の資料の一つである(葛西 2002)。この牛ヶ沢(3)式段階の年代は、(國木田ほか 2024)では約3900～3800BP(較正年代では約4400～4150calBP)であった。永瀬らが三沢市猫又(2)遺跡において、「大木10式併行期」とした横転S字文と鱗状隆帯のモチーフをもつ壺形土器の放射性炭素年代測定を実施したところ、較正前の年代で「 3933 ± 23 BP」、較正年代では約4420～4300calBP(68.3%)となり、後期最初頭の「上村式」の年代範囲に収まることが確認された(永瀬ほか 2026)。同遺跡出土の沈線による「狩猟文」が描かれた深鉢形土器もほぼ同時期の年代(3889 ± 23 BP(4405～4293calBP(68.3%)))である。すなわち、「大木10式併行」とも認識される壺形土器と後期初頭の壺形土器の間には時間的なヒアタスはなく、隆帯による施文手法や狩猟文などが採り入れられながら、再葬用土器棺としてのデザインが確立されていくものとみられる。資料1をはじめ、土坑内から出土した中期後葉以降の壺形土器を、墓との関わりで捉える研究は少なくない(葛西 2002、児玉 2025)。出土状況から「副葬品」や子供の「蔵骨器」としての見方も指摘されている(児玉同)が、成人用の再葬土器棺として利用されたものがあるのかどうか、今後も検討が必要であろう。

おわりに

本稿を執筆するにあたり、中村耕作氏、成田滋彦氏、村本恵一郎氏からは、大久保遺跡の情報や資料調査についてご配慮をいただきました。下記の方々、機関からもご協力、ご助言を賜りました。記して感謝を申し上げます。なお、本報告は、JSPS 科研費(24K22547)の成果の一部も含まれています。

岡田康博、小笠原雅行、岡本洋、小保内裕之、株式会社ラング、菅野智則、国立歴史民俗博物館、児玉大成、小林克、関根達人、茅野嘉雄、千葉史、中澤寛将、長崎潤一、野口淳、福田裕二、村本周三、横山真

註

- 1) 撮影に用いたカメラは、資料1に対してはCanonのEOS 7D、レンズはEFS15-85 mmである。資料3はOMソリューションズ社製「Tough-TG6」である。
- 2) 中の平遺跡は、1次調査報告書(青森県教育委員会 1973)では中平遺跡として報告された。だが、三厩村の土地台帳や住

民の通称により中の平遺跡として改められた。

- 3) この認識は、鈴木（1998）、永瀬（2015）の所見による。（永瀬 2015）は肉眼による観察所見のため、胎土分析などに基づく検証が必要だが、例えば西目屋村水上（2）遺跡では、大木 8b 式の壺形土器が胎土分析によって東北部の所産と判明している（青森県教育委員会 2017）。なお、胴部に縄文地文と黒色漆が塗布された三内丸山遺跡出土の壺形土器については「在地製作」の可能性もある（青森県教育委員会 2018）。
- 4) 円筒上層式、最花式の器種の少なさは、小笠原（2008）、菅野（2012）の研究で指摘されている。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会（1973a）『中平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 7
- 青森県教育委員会（1973b）『三厩村中の平遺跡発掘調査略報』青森県埋蔵文化財調査報告書 16
- 青森県教育委員会（1975）『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 25
- 青森県教育委員会（1976）『五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 29
- 青森県教育委員会（1978）『三内澤部遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 41
- 青森県教育委員会（1989）『富ノ沢（1）・（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 118
- 青森県教育委員会（1991）『富ノ沢（1）・（2）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 132
- 青森県教育委員会（1991）『富ノ沢（1）・（2）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書 133
- 青森県教育委員会（1991）『富ノ沢（2）遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書 137
- 青森県教育委員会（1992）『富ノ沢（2）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書 143
- 青森県教育委員会（1993）『富ノ沢（2）遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書 147
- 青森県教育委員会（1993）『野場（5）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 150
- 青森県教育委員会（1991）『津山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 221
- 青森県教育委員会（2017）『水上（2）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書 575
- 青森県教育委員会（2018）『三内丸山遺跡 44』青森県埋蔵文化財調査報告書 588
- 青森県教育委員会（2019）『後平（1）遺跡・後平（2）遺跡・後平（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 598
- 青森県埋蔵文化財調査センター（2025）『令和 7 年度青森県埋蔵文化財調査センター要覧』
- 青森県五戸町（1967）『五戸町誌 上巻』五戸町史刊行委員会
- 阿部昭典（2008）「有孔鏝付土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小笠原雅行（2008）「円筒上層式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小保内裕之（2008）「陸奥大木系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 葛西 勳（2002）『再葬土器棺墓の研究』「再葬土器棺墓の研究」刊行会
- 菅野智則（2012）「東北地方北部における縄文中期後半集落に関する基礎的研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』15
青森県教育委員会
- 國木田大・永瀬史人・米田譲・秦光次郎（2024）「西目屋村水上（2）遺跡における放射性炭素年代測定と炭素・窒素同位体比分析」『研究紀要』29 青森県埋蔵文化財調査センター
- 児玉大成（2025）『彩色土器の考古学的研究』アクセス 21 出版
- 鈴木克彦（1998）「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』3 青森県埋蔵文化財調査センター
- 永瀬史人（2015）「北東北における円筒土器文化の変容過程に関する考古学的研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』18
青森県教育委員会
- 永瀬史人・國木田大・米田穰・工藤司（2026）「三沢市猫又（2）遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」『青森県考古学』33
- 成田滋彦（2000）「円筒上層式に於ける大木 7b・8a 式について」『村越 潔先生古希記念論文集』
弘前大学教育学部考古学研究室 0B 会
- 文化財保護委員会（1968）『全国遺跡地図（青森県）』
- 本間 宏（1987）「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）-東北地方北部を中心に-」『よねしろ考古』3

近野遺跡の未報告資料の再報告

長谷川 大旗*・山地 雄大**・高橋 哲*

1 概要

本稿は、青森県青森市近野遺跡等から出土した遺物のうち、報告書に掲載されなかった遺物を中心に再報告するものである。近野遺跡は、青森市大字安田字近野に所在し、青森市役所から西に4kmの沖館川右岸に広がる段丘上、標高16mに位置する。特別史跡三内丸山遺跡の東隣に位置し、一部は特別史跡三内丸山遺跡の範囲に含まれている。青森県総合運動公園や県立美術館、市道里見丸山線(発掘当時は県道)、民間事業に伴う多数の発掘調査が県教育委員会や市教育委員会により行われている。最初の発掘調査は昭和48年(1973)で、平成15年(2003)が最新の調査である。これまで刊行された発掘調査報告書は、県教育委員会が10冊、市教育委員会が1冊である。発掘調査により、縄文時代前期～後期、平安時代の集落跡が明らかになっている。人物線刻石冠1点は県重宝に指定されている。

本稿で、再報告する遺物の多くは、近野遺跡Ⅱ(青森県教育委員会 1975)、近野遺跡Ⅲ(青森県教育委員会 1976)、近野遺跡Ⅳ(青森県教育委員会 1978)で未報告とされた遺物である。土製品・石製品の未報告資料は8箱分(テンバコ P-15)ある。このうち、動物内蔵土器1点を成田滋彦(2004)、土偶・土製品の一部(2箱)を成田滋彦(2009)が報告している。今回は67点(3箱)を報告した。残りの未報告資料(3箱)は機を改め報告したい。併せて近野遺跡Ⅸ(青森県教育委員会 2006)で、口絵写真で報告されたヒスイ原石1点、三内丸山遺跡(青森県教育委員会 1976)から出土した未報告資料のミニチュア土器1点、黒曜石製石器3点を報告した。紙幅の都合上、遺物の事実記載は省略し、観察所見は観察表に記載した。執筆分担は、長谷川が編集と写真図版作成、実測図作成の一部、山地が次章以降の執筆と実測図作成の一部、高橋は実測図作成の多くを担当した。執筆者は文末に記載した。

(長谷川)

2 近野遺跡出土ヒスイをめぐるこれまでの評価

青森市近野遺跡は、ヒスイの大型礫が出土している。ヒスイの穿孔前や穿孔途中の未成品が出土した三内丸山遺跡と隣接することから、近野遺跡を含む三内丸山遺跡一帯でヒスイ加工が行われていたと評価されてきた(福田 2018)。

近年、三内丸山遺跡出土ヒスイの全点が提示され、ヒスイ加工の具体的な工程が検討されている(山地・業天 2024)。そこでは、大型礫ないし多面体敲石のような球状の素材をもとに敲打・研磨・穿孔を行う大珠の製作技術と漂石を分割した剥片をもとにした研磨・穿孔を行う小珠(垂飾)の製作技術が存在している。前者では、研磨以降の工程が残されているが、その素材の搬入形態は不明である。こうしたなかで、近野遺跡出土のヒスイ大型礫については、ヒスイの搬入形態を検討するうえで重要である。

これまで近野遺跡出土大型礫をもとに漠然とヒスイの調達から加工までが三内丸山遺跡一帯で行われていたことが評価されてきたものの、その実態は検討されていない。今回は、この大型礫が根付形大珠製作に見合う素材かどうかも含めて、再検討したい。また、近野遺跡では、縄文時代後期のヒスイ資料も確認されることから中期から後期にかけてのヒスイ利用も検討する。

* 青森県埋蔵文化財調査センター ** 青森県教育庁文化財保護課

3 近野遺跡出土ヒスイ

近野遺跡でのヒスイ資料は、これまで報告書掲載外であった資料も含めて5点出土している。ここでは、想定される帰属時期ごとに各資料について紹介する。

(1) 縄文時代中期中葉

・大型礫（図7-8）（青森県教育委員会2006『近野遺跡IX』第418集：口絵）

緑色に茶褐色が縞状に入る長方体を呈するヒスイの原石である。人為的な剥離の痕跡はなく、風化した節理面で構成されることから、河川転石を採取したものと思われる。大きさは、最も長い辺（長軸）で108mmもあり、ヒスイ原産地付近に所在する糸魚川市長者ヶ原遺跡出土の原石と比較しても、特大・大・中・小の4分類のうち大サイズ（長軸80mm以上130mm未満）に入るものである（小池2025）。原産地遺跡のなかでも比較的大型な原石が、北東北に搬入されていたことを示す資料である。

出土地点は、F区谷部の上流部支流1と本流の合流点の谷底である（図2）。谷部では、縄文時代以外も含めて複数時期の土器群が12層～15層にかけて出土しており、層位的に切り分けることは困難であるものの、縄文時代中期中葉の円筒上層d～e式の土器群が集中して出土するとされていることから、この時期に帰属するとみられる（青森県教育委員会2006）。

・有孔製品（青森県教育委員会2006『近野遺跡IX』第418集：図121-8）

緑色に白色が混じるヒスイを用い、全面が研磨された後に中央部で穿孔されている。片側の穿孔部の直径が大きいことから、一方向に穿孔されたとみられる。穿孔部を中心に半欠しているが、涙滴形ないし三角形を呈するものと思われる。

F区谷部のDS-214グリッドから出土しており（図2）、この付近では、縄文時代中期中葉の円筒上層d～e式が多く出土しており、213～216ラインの東斜面で中期中葉の土器が一面に集積し、捨て場の様相を呈しているとされていることから、本資料もこの時期に帰属するとみられる（青森県教育委員会2006）。

(2) 縄文時代後期前葉

・垂飾（図4-5）（青森県教育委員会1975『近野遺跡（II）』第22集：図34-3）

本資料は半月形を呈し、緑色のヒスイを用いているものの、器面にクラックが多数みられる。片側の穿孔部の直径が大きいことから、一方向に穿孔されたとみられる。

報告書では、出土地点は明らかにされていない。注記番号には「74近207ELⅡ」とあることから207ELグリッド出土とみられ、EE～EK区の十腰内Ⅰ式を主体とした包含層から出土している（図2）。その周辺からは「小竪穴遺構」とされる十腰内Ⅰ式に帰属する遺構が検出されており、本資料も縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式）に帰属するとみられる。

・垂飾（図4-6）（青森県教育委員会1975『近野遺跡（II）』第22集：掲載外 H区Ⅰ～Ⅱ層）

本資料は『近野遺跡（II）』の掲載外資料である。半月形を呈し、緑色のヒスイを用いている。形態的には上記の（図4-5）と類似する。片側の穿孔部の直径が大きいことから、一方向に穿孔されたとみられる。出土地点は、昭和49年（1974）調査区のH区とされているが、地点が不明であるものの、当該年の調査では十腰内Ⅰ式の資料が主体的であるため、本資料も縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式）に帰属するとみられる。

・ヒスイ荒割材（図4-7）（青森県教育委員会1975『近野遺跡（II）』第22集：掲載外 209EⅡ）

本資料は『近野遺跡（II）』の掲載外資料である。形態は不定形を呈し、緑色部と白色化した風化面で

構成される。緑色部には、黒色のスス状付着物が確認できる。ヒスイの場合は、節理面と人為的な剥離面を区別することが困難である。白色部は風化面であるが、緑色部の特に右側面及び下面は剥離面と考えられ、荒割された資料の可能性がある。今後、加工法としての加熱痕跡と目される黒色のスス状付着物や白色風化(加藤 2025)と併せて検討する必要がある。

注記番号には「74近209EIⅡ」とあることから209EIグリッド出土とみられ、図4-5と同様にEE～EK区の十腰内Ⅰ式を主体とした包含層から出土している(図2)。そのため、縄文時代後期前葉(十腰内Ⅰ式)に帰属するとみられる。

4 近野遺跡とその周辺における縄文時代中期～後期のヒスイ利用

(1) 縄文時代中期中葉

この時期ヒスイ製品としては、有孔製品(垂飾)が出土するのみである。谷部からは、ヒスイ大型礫が出土している。一方で、隣接する三内丸山遺跡では、当該期に複数の盛土が継続して形成されており、盛土を中心に根付形大珠や小珠とその製作関連資料が残されている。

こうしたなかでヒスイ大型礫(図7-8)は、根付形大珠の素材となりうるか、三内丸山遺跡出土根付形大珠との形状を比較することで検討を試みたい(図1)。

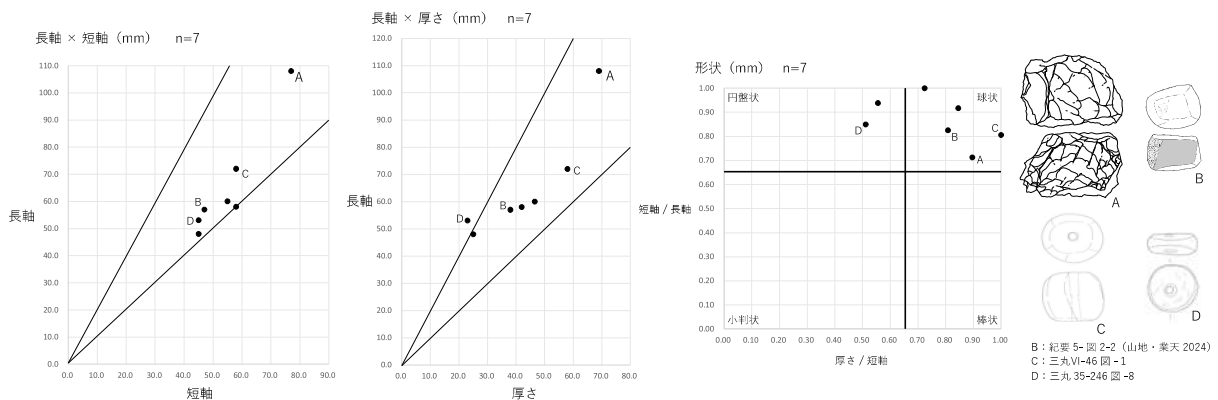


図1 近野遺跡出土大型礫と三内丸山遺跡出土根付形大珠の形状

その結果、大型礫の測定値は、根付形大珠の値から大きく外れている。根付形大珠は、長軸・短軸ともに45mm～60mmの範囲にまとまる傾向があり、そこに根付形大珠の未成品とされる図1-B(山地・業天 2024)も含まれるのに対して、大型礫(図1-A)は長軸が110mmもありはるかに大きい。また、根付形大珠は、長軸に対して厚さにばらつきがあるものの、大型礫の計測値はそこから外れている。一方で、形状の散布図をみていくと、根付形大珠は図1-Dのような薄手の資料を除くと、「球状」に分布する傾向があり、大型礫も該当している。このことから大型礫の形状は総じて「球状」であるものの、根付形大珠よりもはるかに大きいという特徴がある。

ヒスイは強靱で硬質な石材であり、不規則に節理面が発達し剥離を多用することが困難なため、あまり大きく形状修正することなく、製品に仕上げていたと思われる(加藤 2025)。そのため、選択される礫の大きさは、大珠の計測値に近似すると想定でき、測定値が大きく外れたこの大型礫は、根付形大珠に適した球状に近いものでありながらも、大珠素材として選択されずに谷部に残されている。

こうした出土状況からヒスイ搬入の状況を想定できるのではないだろうか。1点の資料からこのこ

とを読み解くには不十分であるが、ヒスイ原産地から球状のヒスイが大きさを問わずに搬入されていたと思われ、三内丸山遺跡一帯で加工する際に、搬入されたものの中から根付形大珠の大きさに見合う素材が選択されていた可能性を想定できる。こうした点を今後究明していくには、北東北でのヒスイ礫出土事例が少なく困難を極めるが、原産地遺跡のヒスイ礫や多面体敲石も含めて形状等を比較していく必要がある。

（２）縄文時代後期前葉

後期前葉に至ると、北東北では、ヒスイ製品の形態的ヴァリエーションが増すと評価されてきた(福田 1990)。各地で半月形・長楕円形・方形・不整形が確認され、近野遺跡では包含層中から半月形 2点(図4-5・6)が確認されている。さらに、ヒスイ荒割材(図4-7)が玉製品とともに残されている点は注目すべきである。この荒割材が、近野遺跡で剥離されたものかは不明であるが、後期前葉に至ってもなおヒスイが原石ないし素材の状態で搬入されていたと考えられる。

(山地)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 (1975) 『近野遺跡発掘調査報告書 (Ⅱ)』 青森県埋蔵文化財調査報告書 22
- 青森県教育委員会 (1977) 『近野遺跡発掘調査報告書 (Ⅲ)・三内丸山 (Ⅱ) 遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 33
- 青森県教育委員会 (1979) 『近野遺跡発掘調査報告書 (Ⅳ)』 青森県埋蔵文化財調査報告書 47
- 青森県教育委員会 (2006) 『近野遺跡Ⅸ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 418
- 青森県教育委員会 (2007) 『近野遺跡Ⅹ』 青森県埋蔵文化財調査報告書 432
- 飯塚義之・杉野森淳子・秦光次郎 (2021) 「非破壊化学分析法による青森県地域の縄文石器石材の化学分析 (第2報)」 『研究紀要』 26
青森県埋蔵文化財調査センター 1-6 頁
- 加藤学 (2025) 「ヒスイの加熱処理と玉製作」 『越佐からみた列島の交流と地域社会 日本考古学協会 2025 新潟大会研究発表資料集』 日本考古学協会 2025 新潟大会実行委員会 29-37 頁
- 小池悠介 (2025) 「ヒスイ原産地遺跡における縄文時代のヒスイ利用」 『越佐からみた列島の交流と地域社会 日本考古学協会 2025 新潟大会研究発表資料集』 日本考古学協会 2025 新潟大会実行委員会 44-52 頁
- 高橋哲 (2024) 「三内丸山遺跡出土品の再整理事業に係る資料の考察」 『特別史跡三内丸山遺跡研究紀要』 5 三内丸山遺跡センター 59-68 頁
- 成田滋彦 (2004) 「動物形内蔵土器 - 近野遺跡の追加資料 -」 『研究紀要』 9 青森県埋蔵文化財調査センター 59-60 頁
- 成田滋彦 (2009) 「青森市近野遺跡・野辺地町槻ノ木 (1) 遺跡の未報告土偶・土製品 - 副題 土偶は分配されたのか -」 『研究紀要』 14 青森県埋蔵文化財調査センター 49-58 頁
- 福田友之 (1990) 「本州北端の硬玉 (翡翠) 製玉飾り」 『青森県考古学』 5 青森県考古学会 17-36 頁
- 福田友之 (2018) 「第4節 青森県域出土のヒスイ製玉類 (2)」 『東北北部先史文化の考古学』 同成社 109-124 頁
- 山地雄大・業天唯正 (2024) 「三内丸山遺跡におけるヒスイ加工と玉類の展開」 『特別史跡三内丸山遺跡研究紀要』 5 三内丸山遺跡センター 7-20 頁

表1 観察表

報告書	図版	写真	種別	器種	出土地	層位	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
近野遺跡II 22集	3-1	1-1	土器	脚付土器か	EJ210	II	(6.3)	(4.8)	(3.6)	下部に窪み
	3-2	1-2	土器	動物内蔵土器	EF210	I	(4.4)	(3.0)	(2.2)	土器底部内面に付着、刺突文、成田(2004)報告済
	3-3	1-3	土器	動物内蔵土器	DP108	II	(4.3)	(3.0)	(2.1)	刺突文
	3-4	1-4	土製品	土偶	注記なし	-	(5.6)	(3.5)	(1.9)	沈線文
	3-5	1-5	土製品	土冠	DM103	II	4.9	3.1	3.3	無文
	3-6	1-6	土製品	垂飾	50H	パルト	(5.2)	6.5	1.8	
	3-7	1-7	土製品	土製品	EL809	I~II	3.4	3.6	1.6	刺突文
	3-8	1-8	土製品	土製勾玉	39H	覆土	4.0	3.9	1.1	鉤形、孔あり、古代か
	3-9	1-9	礫石器	磨製石斧	注記なし	-	6.2	3.0	1.4	蛇紋岩
	3-10	1-10	礫石器	磨製石斧	注記剥落	II	3.6	2.2	1.1	緑色岩、基部再加工
	3-11	1-11	礫石器	磨製石斧	表採		(2.8)	2.2	0.9	緑色岩、基部再加工
	3-12	1-12	礫石器	磨製石斧	E1210	II	(1.9)	(1.9)	(0.9)	緑色岩、基部断片
近野遺跡III 33集	3-13	1-13	石製品	垂飾	住居址7、W23・N5付近		3.9	3.7	0.8	凝灰岩、円盤状で中央に孔、側面に沈線1条周る。
	3-14	1-14	石製品	線刻礫	69H	II	5.4	4.5	2.0	凝灰岩、表裏に擦痕顕著
	3-15	1-15	石製品	石製容器	DM214	I	7.8	4.7	1.4	凝灰岩、船底形、ミニチュア石皿か
	4-1	2-1	石製品	三角形石製品	注記なし	-	5.4	4.3	0.7	凝灰岩、無文
	4-2	2-2	石製品	三角形石製品	DT179	I	3.9	4.5	0.9	凝灰岩、沈線文
	4-3	2-3	石製品	石製品	注記なし	-	(5.7)	4.1	1.8	緑色岩
	4-4	2-4	石製品	両垂石	EE200	I	3.4	2.3	3.2	珪質頁岩、糸巻痕あり(黒色付着物)
	4-5	2-5	石製品	垂飾	EL207	II	3.1	1.6	1.4	ヒスイ、14.1g、片側穿孔、煤付着、白・黒・褐色変色、被熱、近野II(33集)報告済(図34-3)
	4-6	2-6	石製品	垂飾	H区	I~II	2.5	1.5	1.5	ヒスイ、19.3g、片側穿孔、白・褐色変色、被熱か
	4-7	2-7	礫石器	粗割材	E1209	II	5.7	4.5	2.6	ヒスイ、86.3g、粗割段階、炭化物付着、褐色変色、被熱素材
	4-8	2-8	土製品	土冠	注記なし	-	12.5	5.0	7.2	家形、無文、突帯周る
	4-9	2-9	土製品	土冠	注記なし	-	11.0	(9.9)	(3.8)	両端に突起。類例は高橋(2023)にあり。
5-1	3-1	土製品	垂飾	126H?		(7.8)	(6.3)	2.4	穿孔1	
5-2	3-2	土製品	垂飾	66住	B1~2	(6.7)	(9.2)	2.8	穿孔1	
5-3	3-3	土製品	垂飾	注記なし		(7.0)	(6.6)	3.1	穿孔1	
5-4	3-4	土製品	ミニチュア土器	70H A区	5~8	5.9	4.3	2.7	台付鉢形、無文	
5-5	3-5	土製品	ミニチュア土器	69H/D097	1	4.4	2.1	2.3	壺形、最大径5.1cm、ひとつなぎの横S字文4単位	
5-6	3-6	土製品	ミニチュア土器	DH105	2	(3.0)	6.0	(3.1)	台付浅鉢形、口縁突起2単位、脚付か	
5-7	3-7	土製品	ミニチュア土器	注記なし	-	2.1	3.2	1.6	鉢形、沈線文、文様3単位	
5-8	3-8	土製品	ミニチュア土器	注記剥落	-	1.1	4.2× 2.3	-	片口形、無文	
5-9	3-9	土製品	ミニチュア土器	DK107	2	(2.6)	1.7	1.5	片口形、舟形	
5-10	3-10	土製品	鐔形土製品	103小	1	8.4	(5.8)	(1.7)	沈線文、縄文、孔あり、内面に煤等の付着物なし	
5-11	3-11	土製品	鐔形土製品	RS103	II	4.6	3.4	-	無文、頂部二股、穿孔	
5-12	3-12	土製品	鐔形土製品	CH54	4	5.0	2.4	1.2	底部穿孔、無文	
5-13	4-1	土製品	三角形土製品	D0101	I	5.1	4.4	1.4	突起付着、刺突文	
5-14	4-2	土製品	三角形土製品	72H	1	(3.3)	(3.3)	(2.5)	突起付着か、無文	
5-15	4-3	土製品	環状土製品	EJ・H115	I	-	2.7	2.1	刺突文、沈線文	
5-16	4-4	土製品	球状土製品	DK109	II	4.5	4.5	3.3		
5-17	4-5	土製品	土製品	EQ117	I	(5.2)	5.3	1.4	表裏・側面に沈線文	
5-18	4-6	土製品	土玉	注記なし	-	2.6	2.0	1.9	長軸に沿って孔	
5-19	4-7	土製品	土製勾玉	103号住	カマド4	(3.5)	1.4	1.2	古代	
5-20	4-8	土製品	土玉	131小	2	1.0	1.0	0.7	孔あり、古代の可能性あり	
6-1	4-9	礫石器	磨製石斧	69H/DQ105	II	7.1	1.2	1.0	緑色岩、鑿形	
6-2	4-10	礫石器	磨製石斧	DK104	II	5.4	1.2	0.8	蛇紋岩、鑿形	
6-3	4-11	礫石器	磨製石斧	69H/DQ105	II	4.3	1.0	0.8	緑色岩、鑿形	
6-4	4-12	礫石器	磨製石斧	69H/DP105	II	(2.3)	1.6	0.8	緑色岩	
6-5	4-13	石製品	線刻礫	69H/DP105	II	9.0	5.3	1.6	流紋岩、沈線文	
6-6	4-14	石製品	石冠	DP107	II	7.2	(3.7)	(6.2)	安山岩、赤色付着物、被熱、研磨丹念	
6-7	4-15	石製品	石冠	DP108	2	4.9	(5.3)	(4.4)	安山岩、無文、敲打痕が残る	
三内丸山遺跡 33集	6-8	4-16	土製品	ミニチュア土器	6T-J	I	6.1	3.2	2.5	台付浅鉢形、口縁突起6単位か、胴部穿孔
	6-9	4-17	剥片石器	石槍	注記なし		5.6	3.0	0.9	黒曜石、赤井川
	6-10	4-18	剥片石器	石槍	注記なし		5.9	2.9	1.0	黒曜石
6-11	4-19	剥片石器	両面調整石器	注記なし		5.5	3.5	1.1	黒曜石	
近野遺跡IV 47集	6-12	5-1	土製品	土偶	15H	VI	(3.9)	(5.1)	(2.0)	貫通孔2、沈線文
	6-13	5-2	土製品	三角形土製品	5号遺構	4	3.4	3.9	2.4	無文
	6-14	5-3	土製品	三角形土製品	1H	V	4.5	4.6	1.3	無文
	6-15	5-4	土製品	三角形土製品	EA14	I	5.0	5.1	2.1	刺突文
	7-1	5-5	土製品	棒状土製品	P-5区、包含層A	3	6.2	3.7	2.7	斧状土製品か
	7-2	5-6	土製品	環状土製品	DT35	II	-	1.9	1.4	無文
	7-3	5-7	土製品	垂飾品	13H	III	6.1	2.2	2.2	長軸に沿って孔
	7-4	5-8	石製品	環状石製品	DR-19	I	(8.3)	(4.9)	1.7	凝灰岩
7-5	5-9	石製品	垂飾	EE-16	II	6.7	4.5	0.6	緑色凝灰岩、孔1	
7-6	5-10	石製品	垂飾	E-17	I	4.6	8.8	0.5	緑色岩、孔1、S-12、盲孔1	
7-7	5-11	石製品	石冠	H44?		9.7	5.3	7.0	安山岩、無文、突起あり	
近野IX 418集	7-8	5-12	大型礫	原石	谷部(F2区)	14	6.9	10.8	7.7	ヒスイ(飯塚ほか(2021)で自然科学分析)、846.8g、褐鉄付着、全面自然面、剥離面なし、河川礫か

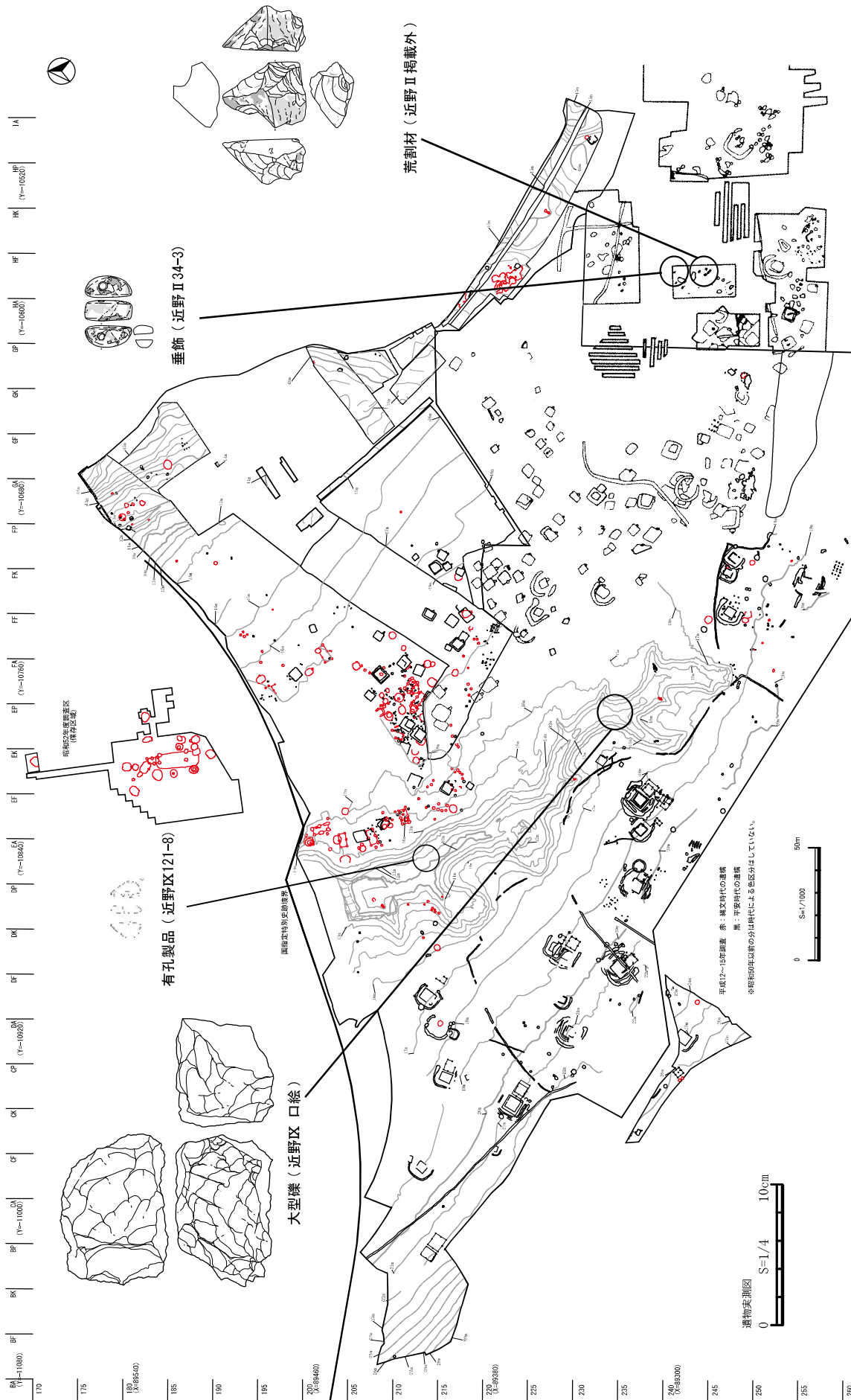


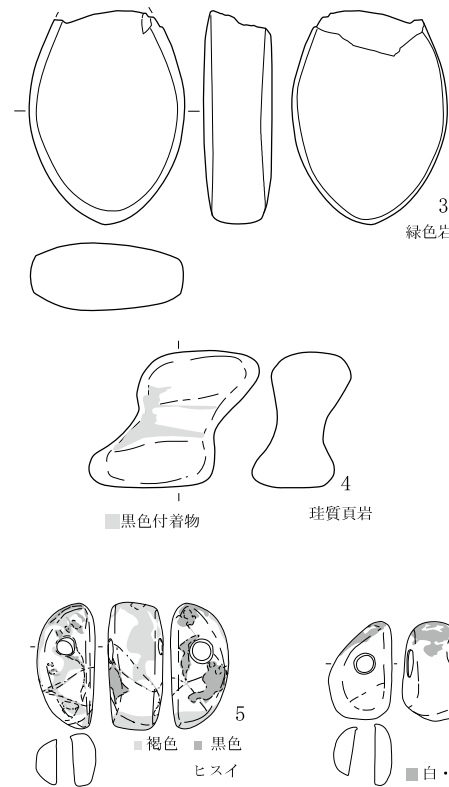
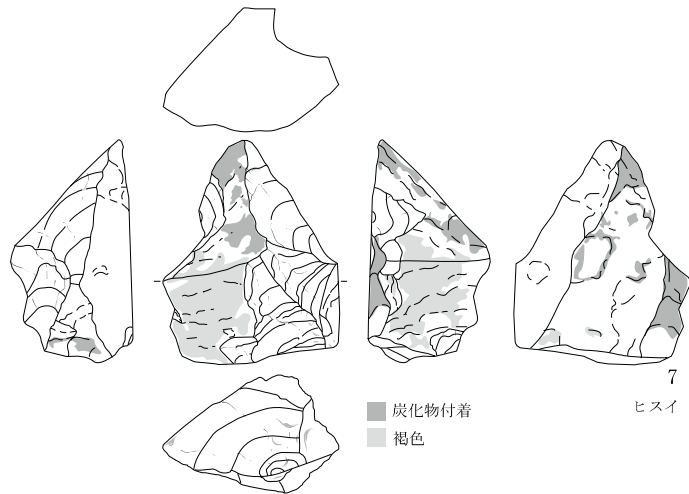
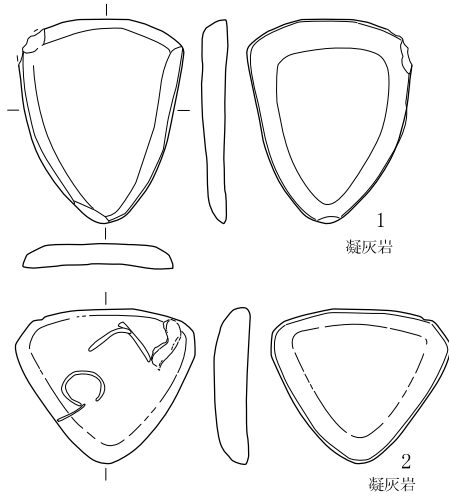
図2 近野遺跡のヒスイ出土位置 (青森県教委2007(に加筆))

近野遺跡Ⅱ (22集)



図3 近野遺跡出土品

近野遺跡Ⅱ (22集)



近野遺跡Ⅲ (33集)

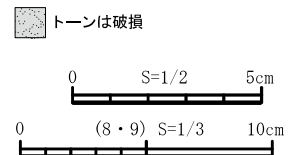
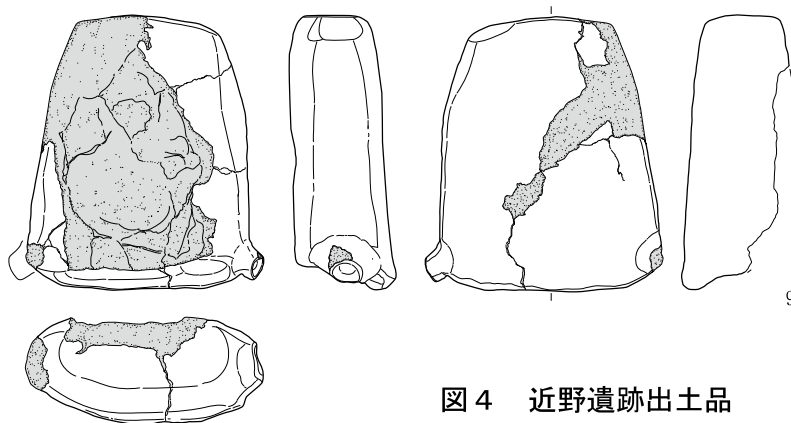
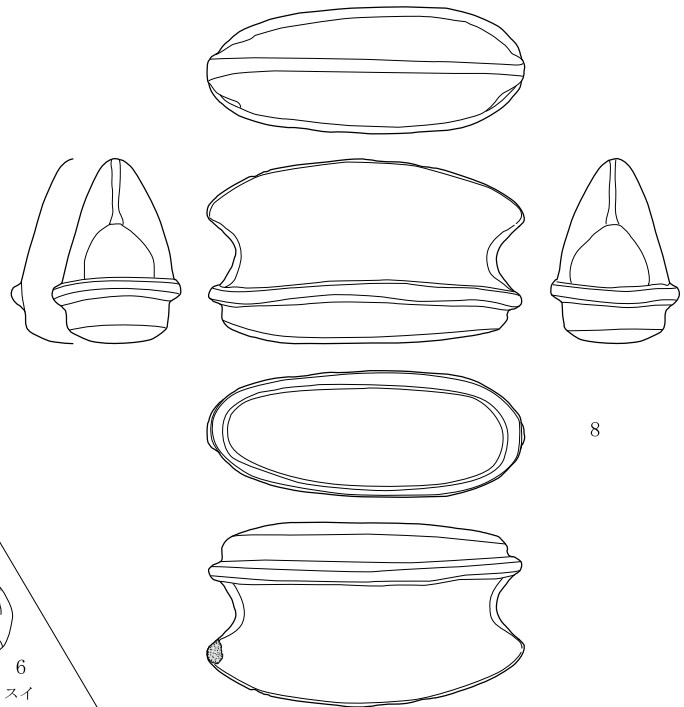


図4 近野遺跡出土品

近野遺跡Ⅲ(33集)

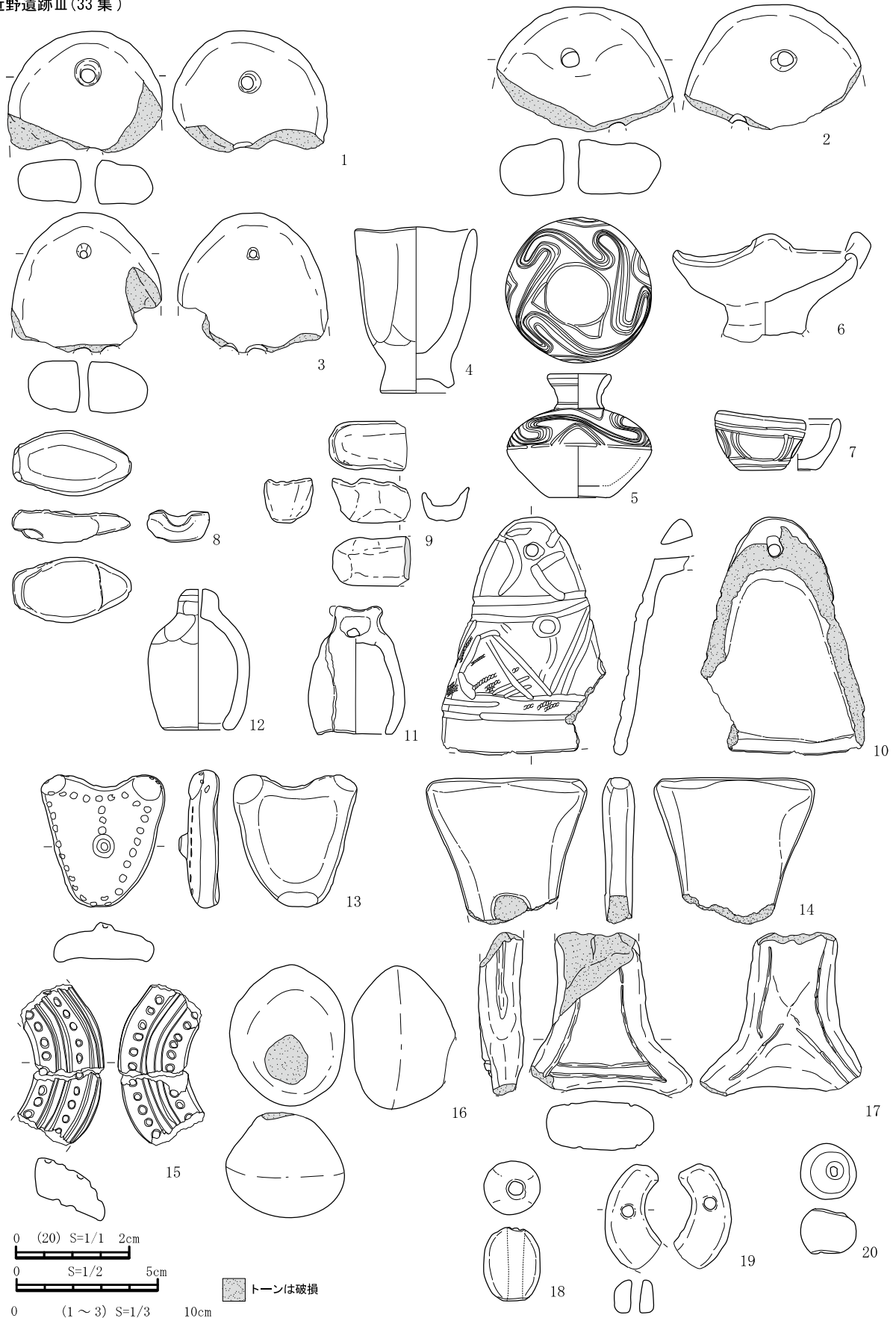
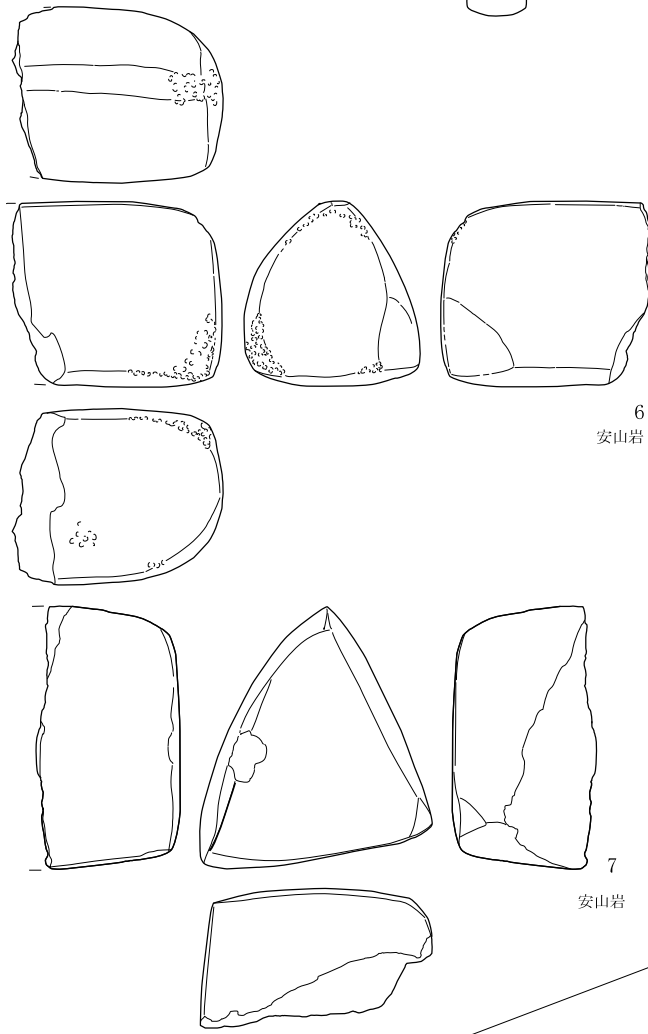
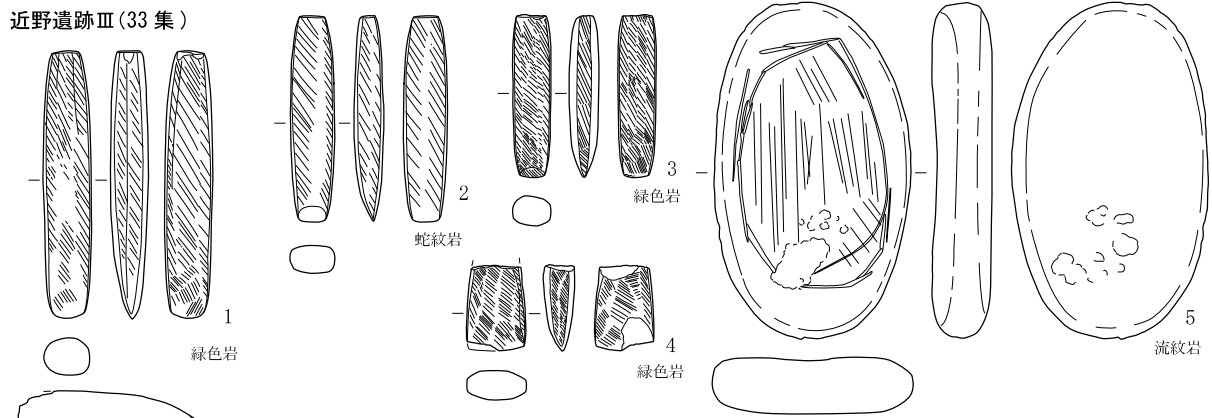
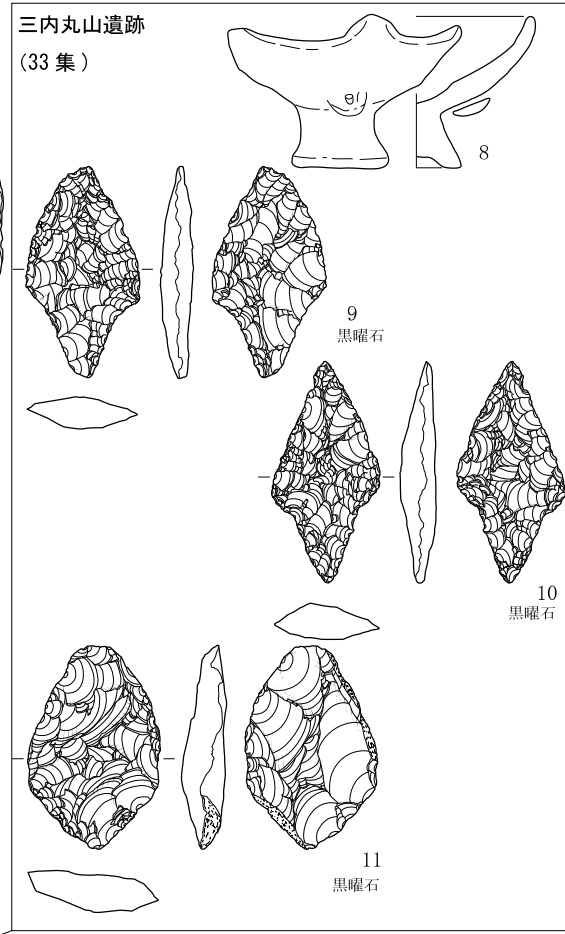


図5 近野遺跡出土品

近野遺跡Ⅲ (33集)



三内丸山遺跡 (33集)



近野遺跡Ⅳ (47集)

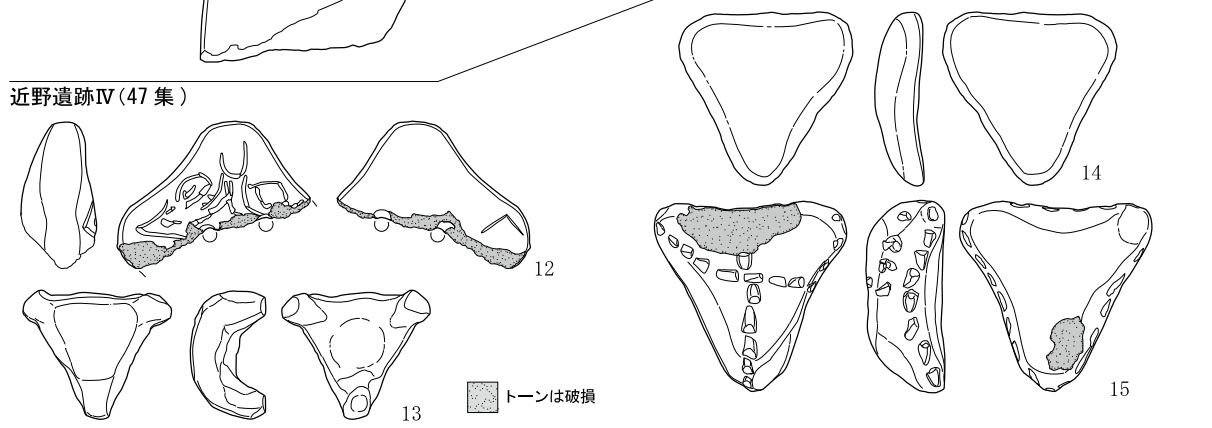
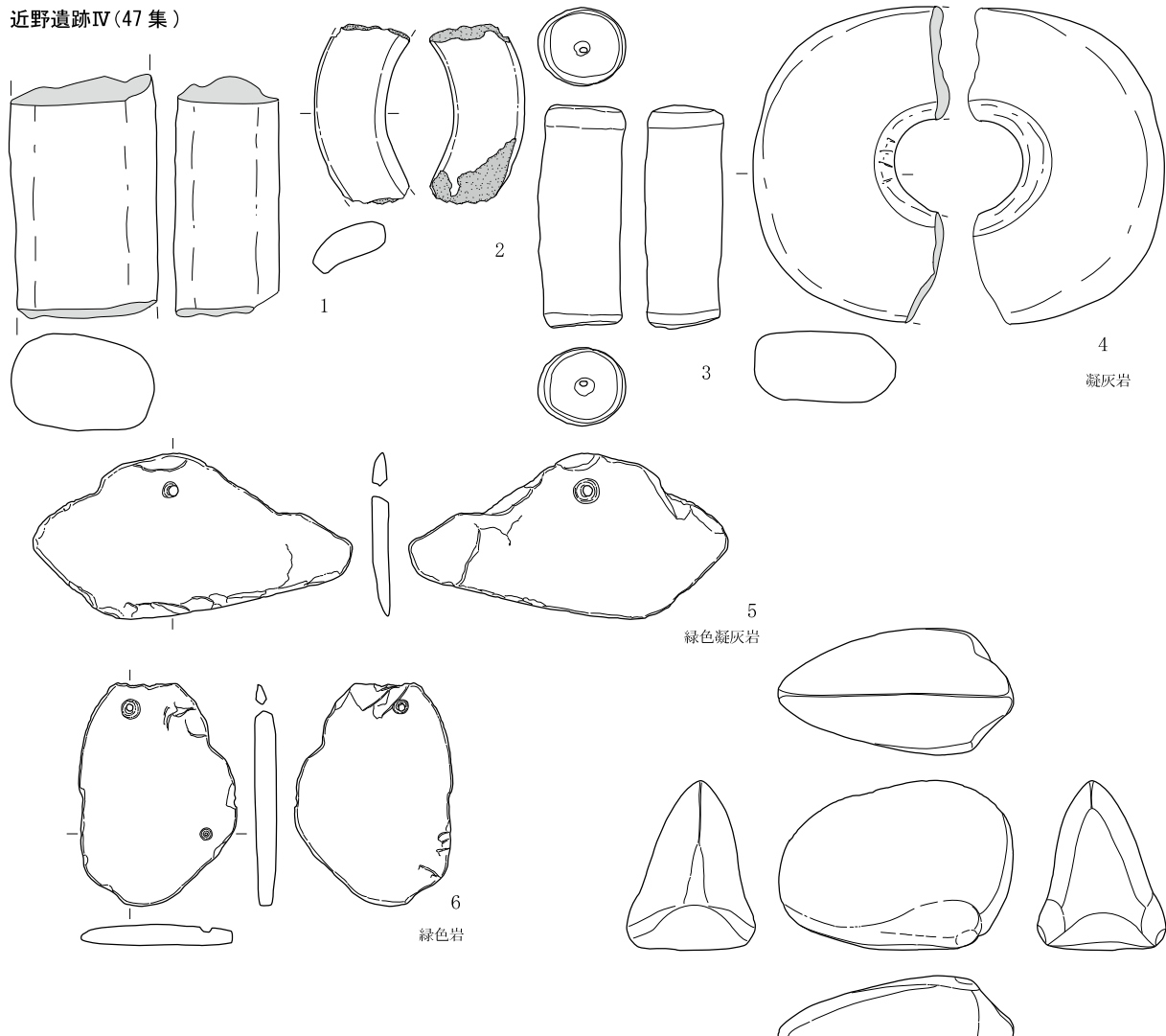


図6 近野遺跡・三内丸山遺跡出土品

近野遺跡Ⅳ(47集)



近野遺跡Ⅴ(418集)

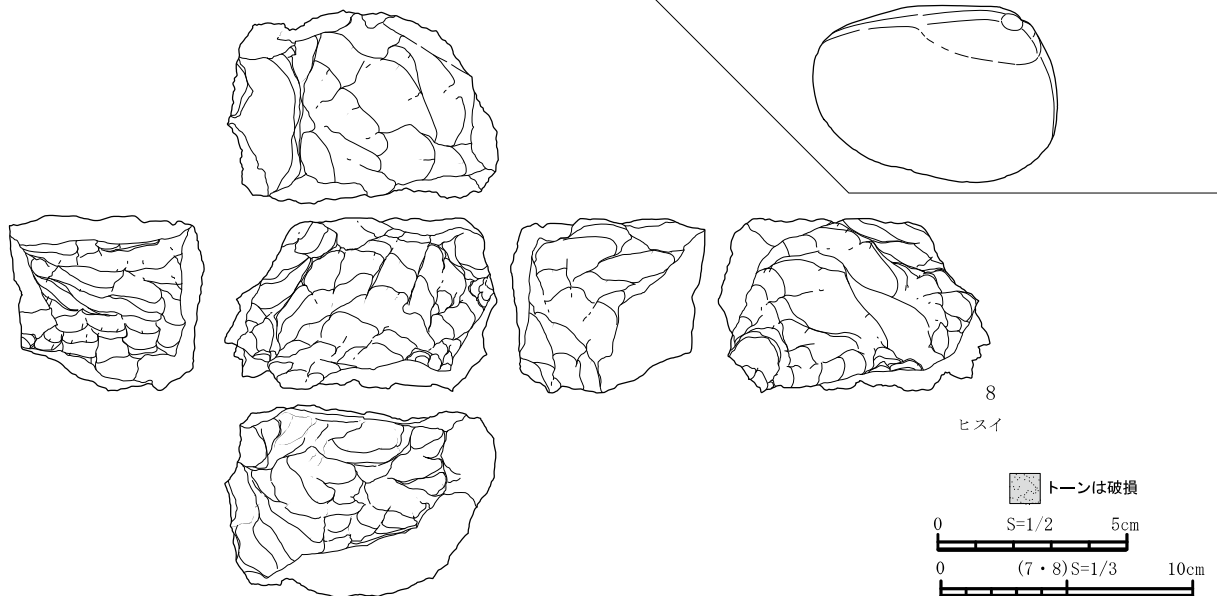


図7 近野遺跡出土品

近野遺跡Ⅱ (22集)

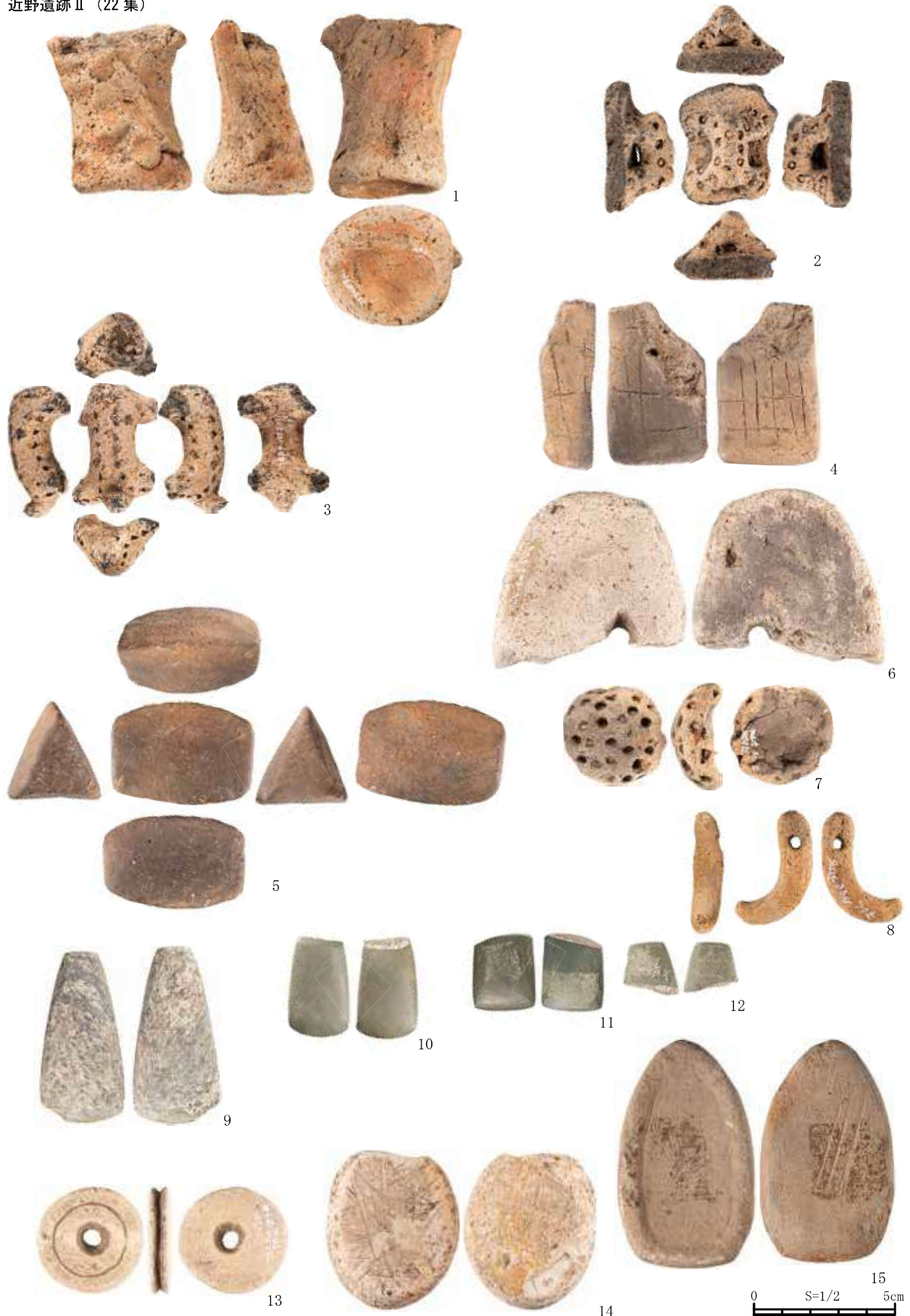


写真 1

近野遺跡Ⅱ (22 集)



近野遺跡Ⅲ (33 集)

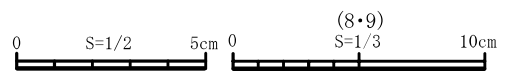


写真 2

近野遺跡Ⅲ (33集)



写真3

近野遺跡Ⅲ (33集)



三内丸山遺跡 (33集)



写真 4

近野遺跡Ⅳ (47 集)



近野遺跡Ⅸ (418 集)

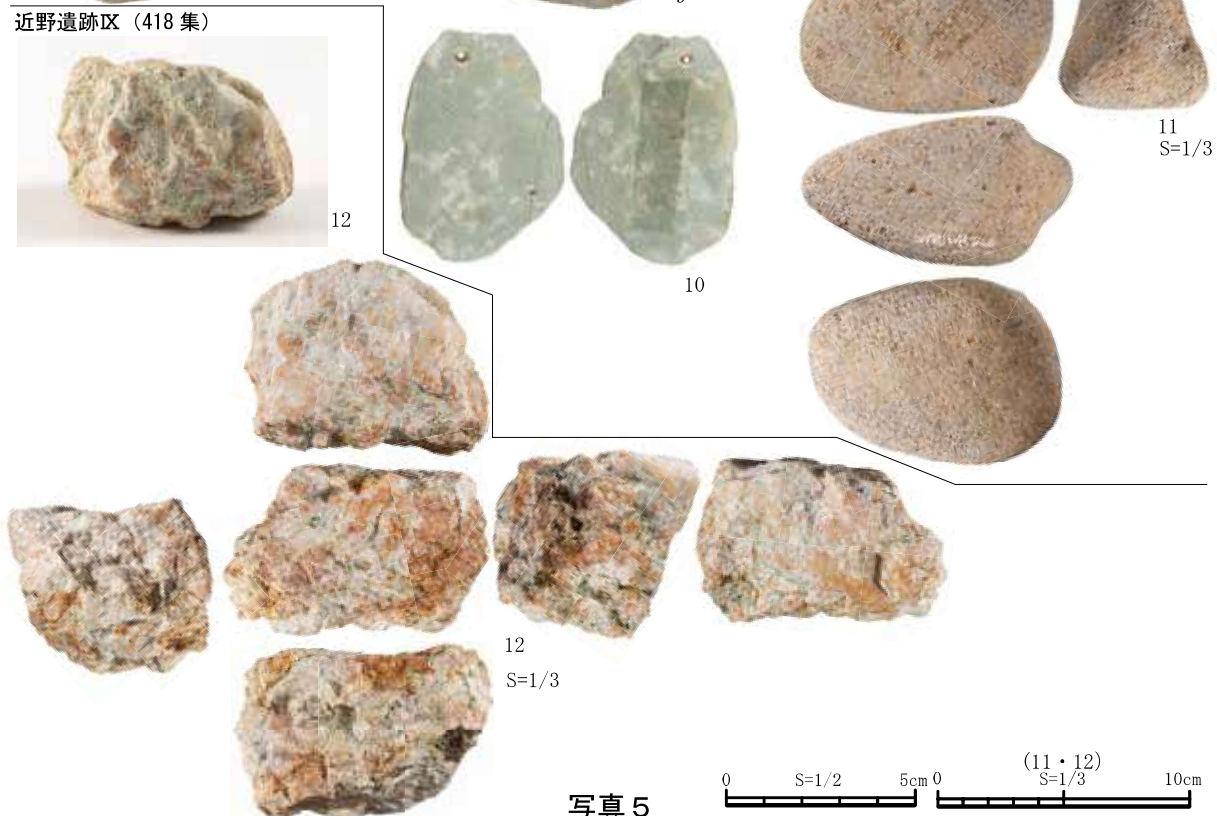


写真 5

0 S=1/2 5cm 0 (11・12) S=1/3 10cm

青森県における縄文時代後期土器の年代測定（2）

小林 謙一*・佐藤 智生**・相原 淳一***

1 測定の経緯

令和6年(2024)、青森県における縄文時代後期の土器編年について、直接土器付着炭化物を採取し、AMS法¹⁴C年代測定をもととした較正年代によって本州北部の実年代による編年の基準を確立し、将来的に広域編年の併行関係を再検討する基盤を構築する目的で年代測定研究を行い、本誌にその第一報を報告した。縄文後期については対象となる資料が多いため、一度には検討が進まず、令和6年度(2024)に青森県埋蔵文化財調査センター保管の既報告資料について試料採取し、そのうち状態の良いものから年代測定を試みた。本稿では、そのうち令和7年度(2025)に測定が行えた12点について報告する。今後とも、後期各時期及び多様な系統の土器付着物について、採取と測定及び年代的検討を進めていく予定である。

なお、本稿は小林謙一が2章を、佐藤智生が3章を分担し、その他3者の協議により執筆した。

2 AMS及びIRMS測定

2-1 対象試料と前処理

土器付着物の試料採取は、縄文後期の資料を対象とし、令和6年(2024)10月11日に青森県埋蔵文化財調査センターにおいて、佐藤、小林が行った。今回はその際に採取した、表1に示すAOMB231～264の34個体を対象とした。そのうち肉眼観察により炭素が回収できると見込めたAOMB-231・234・240・242・243・244・245・250・251・256・257・258・263の13個体、うちAOMB-240・248について内面(a)・外面(b)の両面から付着する炭化物を採取し、合計15試料を対象とした。

AOMB-231・234・240a・240b・242・243a・244a・245・250a・251・256・257b・258a・258b・263bの15試料について前処理を行ったが、うちAOMB-250a・263bについてはすべて溶解し、炭素は回収できなかった。AOMB-242はミネラルが多く測定可能な量の炭素を回収できず、AMS測定できなかった。

表1 測定対象試料一覧

試料	遺跡名	出土地点	報文図番	部位 a	部位 b	時期	土器型式
AOMB-231	五輪野	県 219 集	図 78-60	胴上内面		後期中葉	十腰内 2 K4
AOMB-232	猪ノ鼻 (1)	県 616 集	図 5-1	口縁内		後期中葉	十腰内 3 K6
AOMB-233	猪ノ鼻 (1)	県 616 集	図 9-11	胴上内面	口縁外	後期後葉	十腰内 5 K7
AOMB-234	前坂下(11)	県 71 集	図 81-1	胴下内		後期中葉	十腰内 1-2 K3-4
AOMB-235	滝沢	県 467 集 6 住	図 26-1	胴下内		後期中葉	十腰内 4 K7
AOMB-236	獅子神	県 339 集 1 住	図 4-1		口縁～ 胴下外	後期後葉	十腰内 5 古 K7
AOMB-237	檜館	県 342 集 7 住	図 24-9	胴下内	胴上外	粗製土器	十腰内 5 古 K7 (粗製土器)

AOMB-238	檜館	県 342 集 7 住	図 23-2		胴中外	後期後葉	十腰内 5 古 K7
AOMB-239	駒木沢 (2)	県 532 集	図 24-96	口縁内	胴中外	後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-240	駒木沢 (2)	県 532 集	図 29-223	胴下内	口縁外	後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-241	駒木沢 (2)	県 532 集	図 20-31	口縁内		後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-242	米山 (2)	県 603 集	図 57-1	胴下内		後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-243	米山 (2)	県 630 集	図 11-1	胴下内	口縁外	後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-244	米山 (2)	県 630 集	図 64-2	胴下内	胴下外	後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-245	米山 (2)	県 630 集	図 66-2	胴中内	胴上外	後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-246	米山 (2)	県 630 集	図 68-2	胴中内		後期後葉	十腰内 4-5 K7
AOMB-247	上野尻	県 323 集	図 79-47	口縁内~ 胴上内		後期中葉	十腰内 3 K6
AOMB-248	上野尻	県 323 集	図 57-131	胴中内	口縁外	後期後葉	十腰内 5 K7
AOMB-249	芦沢 (2)	県 540 集	図 15-2	口縁内	胴上外	後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-250	芦沢 (2)	県 540 集	図 29-8	口縁内	胴中外	後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-251	大湊近川	県 104 集	図 16-42	口縁内		後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-252	大湊近川	県 104 集	図 35-3	胴下内	全面外	後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-253	大湊近川	県 104 集	図 37-15	口縁内		後期後葉	十腰内 5 新並行 北海道系(堂林) K7
AOMB-254	大湊近川	県 104 集	図 38-17		口縁外	後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-255	大湊近川	県 104 集	図 41-29		胴下外	後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-256	大湊近川	県 104 集	図 56-19	口縁内		後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-257	大湊近川	県 104 集	図 58-27	口縁内	全面外	後期後葉	十腰内 5 新並行 北海道系(堂林) K7
AOMB-258	大湊近川	県 104 集	図 73-16	口縁内	胴中外	後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-259	大湊近川	県 104 集	図 14-14		胴上外	後期後葉	十腰内 5 新と 堂林の折衷か K7
AOMB-260	大湊近川	県 104 集	図 17-51		胴上外	後期後葉	十腰内 5 並行 北海道系(堂林) K7
AOMB-261	大湊近川	県 104 集	図 39-18	胴上内	胴下外	後期後葉	十腰内 5 新 K7
AOMB-262	獅子神	県 339 集 1 住	図 4-4	口縁内		後期後葉	十腰内 5 古 K7
AOMB-263	猪ノ鼻 (1)	県 616 集	図 3-11	口縁内	胴上外	後期中葉	十腰内 3? K6?
AOMB-264	滝沢	県 467 集 6 住	図 26-2	胴下内		後期中葉	十腰内 4 K7

よって、今回は測定できた 10 個体 12 試料について報告する。

前処理は、国立歴史民俗博物館年代測定実験室において、令和 7 年 (2025) 2 月及び 3 月に、AOMB-243a・244a のみ 8 月に小林が行った。

まず、エタノールで 10 分間の超音波洗浄を行った後、アセトンで 10 分間の超音波洗浄を 1 回行った。これにより油分や接着剤などの成分が除去されたと判断できる。

酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理として、80℃の温度下で、1.2N 塩酸溶液による 1 時間の加熱を 2 回、1N 水酸化ナトリウム溶液による 1 時間の加熱を 3～4 回、1.2N 塩酸溶液による 1 時間の加熱を 2 回繰り返す、最後に純水による 30 分の加熱を 4 回繰り返すし中和していることを確認し、試料を回収した。なお、AOMB-245 は炭化物がしっかりしていたため、自動 AAA 処理装置 (Sakamoto et al. 2004) を用い、80℃の温度下で、1.2N 塩酸溶液による 1 時間の加熱を 2 回、1N 水酸化ナトリウム溶液による 1 時間の加熱を 5 回、1.2N 塩酸溶液による 1 時間の加熱を 3 回繰り返す、最後に純水による 30 分の加熱を 6 回繰り返した。以上の操作で、試料が埋没中に受けた汚染が除去されたと判断できる。測定試料の前処理の結果は表 2 の通りである。

表 2 試料の前処理

試料番号	採取 mg	前処理 mg	回収 mg	回収率%	備考
AOMB-231	28.0	28.0	5.22	18.6	良
AOMB-234	152.0	70.0	42.13	60.2	良
AOMB-240a	26.0	26.0	3.80	14.6	良
AOMB-240b	29.0	29.0	6.47	22.3	良
AOMB-242	29.0	29.0	6.70	23.1	ミネラル
AOMB-243a	33.0	33.0	5.92	17.9	良
AOMB-244a	31.0	31.0	6.05	19.5	良
AOMB-245	28.0	28.0	3.41	12.2	良
AOMB-250a	30.0	30.0	0	0	
AOMB-251	36.0	36.0	11.86	32.9	良
AOMB-256	49.0	49.0	10.80	22.0	良
AOMB-257b	35.0	35.0	6.36	10.3	良
AOMB-258a	29.0	29.0	3.14	10.8	良
AOMB-258b	30.0	30.0	4.92	16.4	良
AOMB-263b	27.0	27.0	0	0	

2-2. 炭素精製及びグラファイト化

以下の作業は、東京大学総合研究博物館年代測定室に委託した。試料は、銀カップに秤量し、elementar 社製 vario ISOTOPE SELECT 元素分析計に導入し、燃焼後、精製された二酸化炭素を真空ガラスラインに導入し、あらかじめ鉄触媒約 2 mg を秤量したコック付き反応管に水素ガス (炭素モル数の 2.2 倍相当) とともに封入して、650℃で 6 時間加熱して実施した (Omori et al. 2017)。

表3 グラファイト化の結果

試料名	グラファイト ID	試料重量	グラファイト化率	グラファイト重量	Fe 重量	C/Fe 比
AOMB-231	GR-21084	2.470 mg	74.4%	1.03 mg	2.05 mg	0.502
AOMB-234	GR-21085	2.782 mg	76.3%	1.06 mg	2.10 mg	0.505
AOMB-240a	GR-21086	2.303 mg	71.0%	0.44 mg	1.90 mg	0.232
AOMB-240b	GR-21087	4.822 mg	80.0%	0.38 mg	2.11 mg	0.180
AOMB-242	N. A.					
AOMB-243a	GR-22174	2.188 mg	97.5%	1.20 mg	1.97 mg	0.609
AOMB-244a	GR-22175	2.267 mg	113.2%	1.37 mg	2.12 mg	0.646
AOMB-245	GR-21088	2.507 mg	95.9%	0.149 mg	4.28 mg	0.035
AOMB-251	GR-21089	2.479 mg	81.4%	0.97 mg	1.99 mg	0.487
AOMB-256	GR-21090	6.885 mg	85.2%	0.81 mg	2.08 mg	0.389
AOMB-257b	GR-21091	4.136 mg	80.6%	1.09 mg	2.09 mg	0.522
AOMB-258a	GR-21092	2.490 mg	80.5%	1.07 mg	1.90 mg	0.563
AOMB-258b	GR-21093	1.889 mg	85.6%	1.06 mg	2.06 mg	0.515

AOMB-242 については、試料秤量時、有機物質を確認できなかったため、測定試料の調整を断念した。

AOMB-245 については、元素分析計での炭素精製の際に確認された炭素量が 400 ナノグラム以下であったため、同等量の標準試料を用意し、微量炭素用のプロトコル(大森ら 2017)にてセメンタイトを生成し、AMS 測定に供した。表中のグラファイト量欄にはセメンタイト生成後の秤量結果による炭素量ではなく、セメンタイト生成時の還元反応前後の還元反応管内の水素、二酸化炭素混合ガス圧の変化から見積もられた炭素量を記した。

2-3. AMS 測定結果

グラファイト化した炭素試料における放射性炭素同位体比の測定は、東京大学総合研究博物館が所有する加速器質量分析装置(AMS)を用いて測定した。多くは令和 7 年(2025)6 月に、AOMB-243a・244a は令和 7 年(2025)11 月に測定した。慣用 ^{14}C 年代(BP 年代)を算出するために、同位体比分別の補正に用いる $\delta^{13}\text{C}$ 値は AMS にて同時測定した値を用いている(Stuiver and Polach 1977)。

較正年代の算出には、OxCAL4.4(Bronk Ramsey, 2009)を使用し、較正データには IntCal20(Reimer et al. 2020)を用いた(図 1~4)。

表4 放射性炭素年代測定の結果

試料名	測定 ID	^{14}C 年代	補正用 $\delta^{13}\text{C}$
AOMB-231	TKA-30058	3531 ± 21 BP	-26.2 ± 0.2 ‰
AOMB-234	TKA-30059	3485 ± 21 BP	-22.5 ± 0.5 ‰
AOMB-240a	TKA-30060	3347 ± 24 BP	-28.6 ± 0.1 ‰
AOMB-240b	TKA-30061	3337 ± 21 BP	-32.9 ± 0.2 ‰

AOMB-242	N. A.		
AOMB-243a	TKA-30893	3596 ± 22 BP	-22.8 ± 0.2 ‰
AOMB-244a	TKA-30894	3378 ± 21 BP	-25.9 ± 0.3 ‰
AOMB-245	TKA-30097	3694 ± 42 BP	-25.1 ± 0.1 ‰
AOMB-251	TKA-30062	3295 ± 21 BP	-22.1 ± 0.4 ‰
AOMB-256	TKA-30063	3335 ± 21 BP	-22.6 ± 0.2 ‰
AOMB-257b	TKA-30064	3120 ± 21 BP	-23.7 ± 0.3 ‰
AOMB-258a	TKA-30065	3546 ± 21 BP	-20.7 ± 0.3 ‰
AOMB-258b	TKA-30066	3266 ± 21 BP	-23.4 ± 0.5 ‰

¹⁴C 年代の誤差は 1 標準偏差を示す。

表 5 推定される較正年代と注記 (cal BP 表記)

試料名	較正年代(1SD)	較正年代(2SD)
AOMB-231	3868 cal BP (3.3%) 3861 cal BP 3850 cal BP (23.6%) 3823 cal BP 3794 cal BP (23.2%) 3768 cal BP 3749 cal BP (18.2%) 3726 cal BP	3887 cal BP (41.5%) 3816 cal BP 3800 cal BP (53.9%) 3720 cal BP
AOMB-234	3827 cal BP (25.4%) 3791 cal BP 3773 cal BP (24.3%) 3741 cal BP 3730 cal BP (18.6%) 3700 cal BP	3832 cal BP (95.4%) 3693 cal BP
AOMB-240a	3626 cal BP (14.8%) 3603 cal BP 3590 cal BP (28.7%) 3556 cal BP 3530 cal BP (24.8%) 3493 cal BP	3680 cal BP (3.0%) 3670 cal BP 3638 cal BP (92.5%) 3488 cal BP
AOMB-240b	3575 cal BP (25.8%) 3548 cal BP 3539 cal BP (42.5%) 3492 cal BP	3635 cal BP (10.0%) 3600 cal BP 3594 cal BP (85.4%) 3482 cal BP
AOMB-243a	3962 cal BP (11.1%) 3949 cal BP 3925 cal BP (52.5%) 3870 cal BP 3858 cal BP (4.6%) 3852 cal BP	3975 cal BP (20.1%) 3940 cal BP 3935 cal BP (75.4%) 3837 cal BP
AOMB-244a	3636 cal BP (68.3%) 3574 cal BP	3690 cal BP (17.5%) 3659 cal BP 3647 cal BP (77.9%) 3563 cal BP
AOMB-245	4138 cal BP (1.8%) 4133 cal BP 4091 cal BP (66.5%) 3976 cal BP	4150 cal BP (95.4%) 3905 cal BP
AOMB-251	3558 cal BP (35.8%) 3525 cal BP 3511 cal BP (7.2%) 3503 cal BP 3495 cal BP (25.3%) 3468 cal BP	3563 cal BP (95.4%) 3460 cal BP

AOMB-256	3574 cal BP (24.7%) 3549 cal BP 3536 cal BP (43.5%) 3492 cal BP	3635 cal BP (8.3%) 3600 cal BP 3594 cal BP (87.1%) 3481 cal BP
AOMB-257b	3375 cal BP (51.2%) 3338 cal BP 3286 cal BP (17.1%) 3271 cal BP	3391 cal BP (65.1%) 3325 cal BP 3297 cal BP (30.3%) 3253 cal BP
AOMB-258a	3880 cal BP (56.4%) 3828 cal BP 3789 cal BP (11.8%) 3775 cal BP	3900 cal BP (64.5%) 3821 cal BP 3797 cal BP (18.6%) 3761 cal BP 3755 cal BP (12.4%) 3723 cal BP
AOMB-258b	3546 cal BP (1.6%) 3544 cal BP 3490 cal BP (66.7%) 3450 cal BP	3561 cal BP (14.8%) 3522 cal BP 3514 cal BP (76.0%) 3446 cal BP 3425 cal BP (4.7%) 3406 cal BP

2-4. EA-IRMS 測定結果

炭素及び窒素の重量含有率及び安定同位体比の測定は、放射性炭素年代測定室において、Thermo Fisher Scientifics 社製の Flash2000 元素分析を前処理装置として、ConFlo IV インターフェースを経由して、Delta V 安定同位体比質量分析装置で測定する、EA-IRMS 装置を用いて行った。約 0.5mg の精製試料を錫箔に包み取り、測定に供した。測定誤差は、同位体比が値付けされている二次標準物質（アラニン等）を試料と同時に測定することで標準偏差を計算した。通常の測定では、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定誤差は 0.2‰、 $\delta^{15}\text{N}$ の誤差は 0.2‰ である。

測定できた AOMB-243a は胴下部内面付着のコゲであり、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が -20‰ と重く、 $\delta^{15}\text{N}$ 値が 14‰ と大きい上に、C/N 比 (mol 換算) が 13 と相対的に小さいことから海洋性の動物質、すなわち魚介類の調理による煮コゲで、海洋リザーバー効果の影響がある可能性が考えられる。年代値を見ても、同様の形式的な位置付けと考えられる試料よりも 100 年以上古い値を示している。

表 6 元素及び安定同位体比の分析結果

試料名	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	炭素濃度	窒素濃度	C/N (mol)
AOMB-231	-28.0‰	9.6‰	53.4%	5.5%	11.3
AOMB-234	-25.1‰	4.9‰	62.5%	4.5%	16.2
AOMB-243a	-21.4‰	14.2‰	58.6%	5.2%	13.1
AOMB-244a	-24.7‰	5.5‰	43.7%	3.1%	16.3
AOMB-251	-24.4‰	10.4‰	59.4%	7.5%	9.3
AOMB-258b	-25.7‰		58.1%	1.6%	43.6

AOMB-258b については、窒素量が少なく、同位体比の測定値は得られなかった。

2-5. 年代的な位置付け

年代を時期ごとに見ていく。以下では、 2σ の有効範囲での較正年代 (1950 年より何年前かの cal BP で表記) について、通常用いられる表記に従い 1 の位を 5 か 0 に丸めて表記する。なお、以下では較正年代確率分布が 10% 以下の範囲は無視したが、確率が低くともその年代範囲が相当する可能性は

あるため、表5を参照されたい。

小林によるこれまでの土器型式別の時期比定と対比させる(小林2017)。縄文時代文化研究会(1999)による広域編年に従い時期区分した縄文後期のK1～K8期(小林2017)に対応させることとする。なお、炭素量不足で限界値以下となったAOMB-242については除外する。

十腰内I～II式(K3～K4期) 十腰内I～II式と考えられるAOMB-234は 3485 ± 20 BP、較正年代で3830 cal BP(95.4%)3695 cal BPの間に含まれる可能性が最も高い。十腰内II式と考えられるAOMB-231は 3531 ± 21 BP、較正年代で3887 cal BP(41.5%)3816 cal BPまたは3800 cal BP(53.9%)3720 cal BPの間に含まれる可能性が高い。

十腰内IV～V式(K7期) まず、AOMB-243aはIRMSによる $\delta^{13}\text{C}$ 値が -21.4% と重く、年代値も 3596 ± 22 BP、較正年代で3935 cal BP(75.4%)3835 cal BPと他に比べて明らかに古い測定値である。内面付着物であり、海産物の煮コゲによる海洋リザーバー効果の影響によって古い年代値となっていると考えられる。AOMB-240は内面a、外面bをともに採取して測定したが、aは 3347 ± 24 BPで較正年代は3640 cal BP(92.5%)3490 cal BP、bは 3337 ± 21 で較正年代は3595 cal BP(85.4%)3480 cal BPとほぼ同じ年代を示す。BPAOMB-244aは 3378 ± 21 で較正年代は3645 cal BP(77.9%)3565 cal BPである。AOMB-245は 3694 ± 42 BP、較正年代で4150 cal BP(95.4%)3905 cal BPと他に比べ明らかに古い年代値となっている。内面付着物であり、海産物の煮コゲによる海洋リザーバー効果の可能性はあるが、測定値からは検討することができない。

十腰内V式(K7期) 十腰内V式とされるAOMB-251は 3295 ± 21 BP、較正年代は3565 cal BP(95.4%)3460 cal BPの間に含まれる可能性が高い。同じく十腰内V式とされるAOMB-256は 3335 ± 21 BP、較正年代は3595 cal BP(87.1%)3480 cal BPの間に含まれる可能性が高い。堂林式とされ十腰内V式並行と考えられるAOMB-257bは外面付着物で 3120 ± 23 BP、較正年代は3390 cal BP(65.1%)3325 cal BPまたは3295 cal BP(30.3%)3255 cal BPの間に含まれる可能性が高い。十腰内V式とされるAOMB-258は、内面付着のaは 3546 ± 21 BP、較正年代は3900 cal BP(64.5%)3820 cal BPなどの間に含まれる可能性が高い。口縁内面付着物であり、IRMSによる安定同位体比を測定していないため正確ではないもののAMSによる $\delta^{13}\text{C}$ 値が -20.7% と重く、同じ土器の外面付着物であるAOMB-258bは 3266 ± 21 BPで較正年代は3515 cal BP(76.0%)3445 cal BPと258aより新しく同時期の土器付着物と近い年代である。よって内面付着物のAOMB-258aは、海洋リザーバー効果の影響によって古い年代値となっている可能性が高い。

このように、十腰内V式期に相当するAOMB-243・245a・258aについては、後期後葉としては古い年代値であり、内面付着物であることから海産物の煮焦げ由来による海洋リザーバー効果の影響によって古い年代となっている可能性が高いと考える。

以上、今回の第二回の後期土器付着物の検討において測定できた事例は、まだ測定数が不足であり、型式時期ごとに測定例を増して再検討する必要がある。また、今回の測定例では海洋リザーバー効果の影響を疑わせる資料が少数ながら認められた。東北地方の後期土器付着物には、地域によって顕著な海洋リザーバー効果が認められる事例もあり(小林2022)、IRMSによる安定同位対比の測定を可能な限り増やして、改めて東北地方の後期中葉から後葉の年代について検討を加えたい。

3 測定対象・測定試料の考古学的概要

分析値が得られた5遺跡10点について述べる(図5・6)。前坂下(11)遺跡を除く4遺跡分は、前回の報告で遺跡立地に触れたので、今回は試料採取土器の特徴を中心に述べる。

1) 五輪野遺跡(測定番号:AOMB-231 図6-1)

試料採取土器の特徴:報文図番:78-60。型式名:十腰内Ⅱ群(県史後期4期)。器種:深鉢。出土地点:A区遺構外(S-25地点)3層。特徴:口縁部無文、胴部上半(肩部)に文様帯を形成し、鋸歯状沈線を施文する。

2) 前坂下(11)遺跡(測定番号:AOMB-234 図6-2)

遺跡立地:東通村役場の南東約11.5km、東に広がる太平洋から約1km西へ入った東北電力(株)東通原子力発電所の西隣、標高25~35mの洪積台地上に位置し、南側には沢が流れる。現況は山林・原野である。

試料採取土器の特徴:報文図番:81-1。型式名:十腰内Ⅰ~Ⅱ群(四ツ石式・県史後期3期第3段階)。但し、幅広の口縁部を最大径とする器形は、十腰内Ⅱ式との近似性も認められる。器種:深鉢。出土地点:A地点遺構外(IT-100地点)第Ⅱ層。特徴:口縁部無文、胴部上半に文様帯を形成、クランク文を5単位配置する。

3) 駒木沢(2)遺跡(測定番号:AOMB-240 図6-3)

試料採取土器の特徴:報文図番:29-223。型式名:十腰内Ⅳ~Ⅴ群(県史後期7期第1段階)。器種:深鉢。出土地点:遺構外(I-15・16地点)第Ⅱ層。特徴:口縁部と胴部上半に文様帯を形成、文様帯内を磨消縄文(異原体羽状充填)による曲線文が周回する。貼瘤が付されない点は、十腰内Ⅳ群に類する。

4) 米山(2)遺跡(測定番号:AOMB-243・244・245 図6-4~6)

試料採取土器の特徴:下記①~③は、いずれも十腰内Ⅳ~Ⅴ群(県史後期7期第1段階)の深鉢である。各々に共通する特徴は、口縁部と胴部上半に文様帯を形成、文様帯内を磨消縄文(異原体羽状を充填)による曲線文が周回し、貼瘤は付されない。前回分析試料(AOMB-196・198)や上記の駒木沢(2)遺跡分析資料に近似する。①AOMB-243報文図番:県630集11-1。出土地点SK192覆土。②AOMB-244報文図番:県630集64-2。出土地点:第19号流路跡Ⅳa層A地点遺構外(VR-222地点)第Ⅳa層。③AOMB-245報文図番:県630集66-2。出土地点:第19号流路跡Ⅳa層A地点遺構外(VQ-218地点)第Ⅳa層。

5) 大湊近川遺跡(測定番号:AOMB-251・256・257・258 図6-7~10)

試料採取土器の特徴:下記①~⑤は、十腰内Ⅴ群(県史後期7期第3段階)と北海道系の突瘤文土器(③)であり、前回分析試料(AOMB-213・216)と同じ組み合わせとなる。①AOMB-251報文図番:県104集16-42。器種:深鉢。出土地点:第101号竪穴住居跡覆土。特徴:口縁端部に文様帯を形成、文様帯内をハの字ないしV字状の刺突が巡る。②AOMB-256報文図番:県104集56-19。器種:深鉢。出土地点:第107号竪穴住居跡覆土。特徴:口縁部に文様帯を複数形成、帯縄文(異原体羽状充填)内に鋸歯状沈線が巡る。③AOMB-257報文図番:県104集58-27。器種:深鉢。出土地点:第107号竪穴住居跡覆土。特徴:北海道系。LR施文後、口縁端部に突瘤文が巡る。前回報告のAOMB-213と同一遺構から出土。④AOMB-258報文図番:県104集73-16。器種:台付深鉢。出土地点:第108号竪穴住居跡覆土。特徴:口縁端部と頸部に文様帯を形成、文様帯内は間隔の狭い無文帯で上下に分割され、多数の縦長の貼瘤が規則的かつ等間隔に配された間にRLが充填される。

謝辞

AMS法炭素14年代測定については、東京大学総合研究博物館と小林謙一科研費研究との共同研究として実施した。2022-2026年度基盤研究(A)「高精度年代体系による東アジア新石器文化過程—地域文化の成立と相互関係—」(研究代表小林謙一、課題番号22H00019)、2021-2025年度基盤研究(S)「酸素同位体比年輪年代法の高精度化による日本列島の気候・生産・人口変動史の定量化」(研究代表中塚武、課題番号21H04980)、の経費を用いている。

本稿を記すにあたり、東京大学総合博物館の米田穰・尾寄大真・大森貴之、国立歴史民俗博物館の坂本稔・箱崎真隆、中央大学考古学研究室の小林尚子、当センターの荒谷伸郎・佐々木雅裕・茅野嘉雄・濱松優介の各氏の協力を得ている。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 (1987) 『大湊近川遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 104
- 青森県教育委員会 (1997) 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 219
- 青森県教育委員会 (2000) 『山下遺跡II・米山(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 274
- 青森県教育委員会 (2013) 『駒木沢(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 532
- 青森県教育委員会 (1982) 『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 71
- 青森県史編さん考古部会編 (2017) 『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 大森貴之 山崎孔平 柁澤貴行 板橋悠 尾寄大真 米田穰 (2017) 「微量試料の高精度放射性炭素年代測定」第20回 AMS シンポジウム
- 小林謙一 佐藤智生 相原淳一 (2023) 「青森県における縄文時代草創期～早期土器の年代測定(1)」『研究紀要』28 青森県埋蔵文化財調査センター
- 小林謙一 佐藤智生 相原淳一 (2024) 「青森県における縄文時代草創期～早期土器の年代測定(2)」『研究紀要』29 青森県埋蔵文化財調査センター
- 小林謙一 佐藤智生 相原淳一 (2025) 「青森県における縄文時代後期土器の年代測定(1)」『研究紀要』30 青森県埋蔵文化財調査センター
- 小林謙一 (2017) 『縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—』 同成社
- 小林謙一 (2022) 「縄文時代後期土器付着物の同位体比の検討」『紀要』史学 67 (291) 中央大学文学部
- 縄文時代文化研究会 (1999) 「縄文時代文化研究の100年」『縄文時代』10
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(4), 337-360.
- Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M. (2017) Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.
- Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., J Heaton, T., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., Manning, S. W., Muscheler, R., Palmer, J. G., Pearson, C., J. van der Plicht, C., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Turney, C. S. M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S. M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon* 62(4), 725-757.
- Sakamoto, M. et al. (2004) An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 223-224: 298-301
- Stuiver., M., and H.A. Polach. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19(3), 355-363.

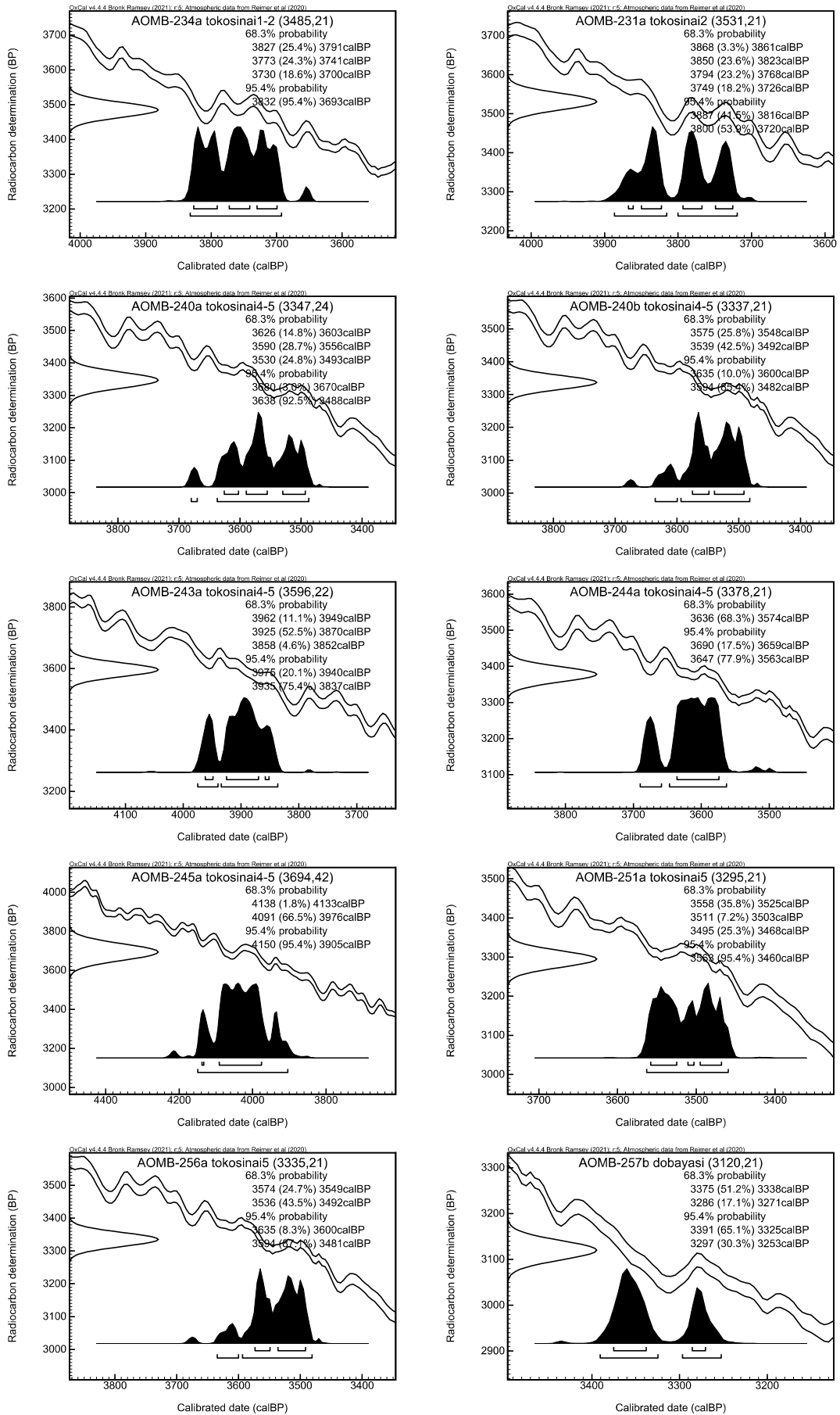


図1 較正年代確率密度分布 (IntCal120, 0xcal14.4) 時期順 その1

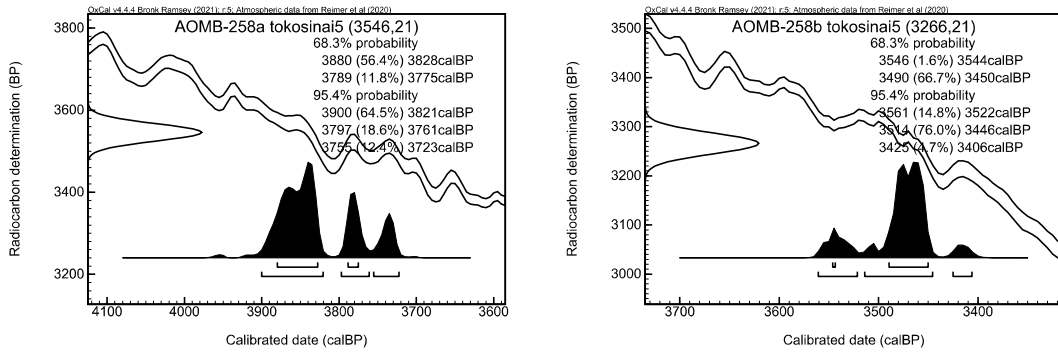


図 2 較正年代確率密度分布 (IntCa120, 0xCa14.4) 時期順 その 2

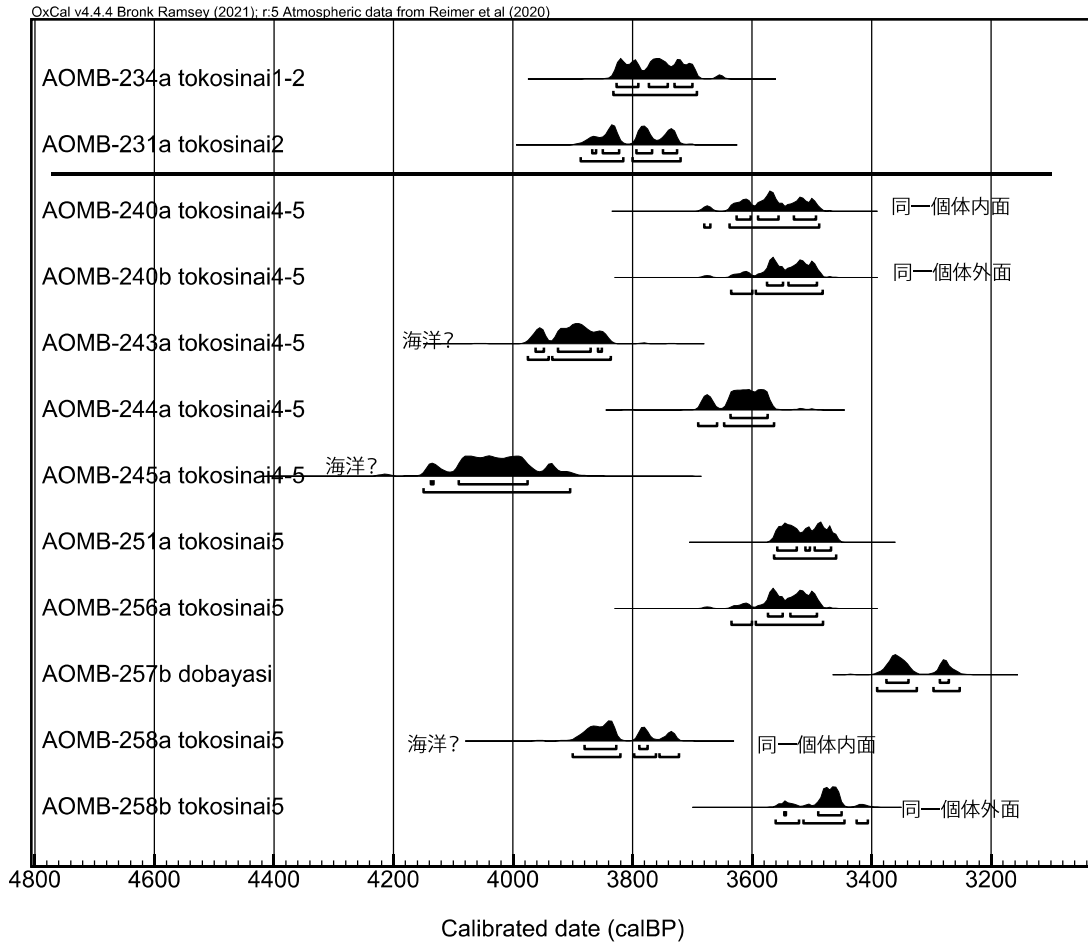
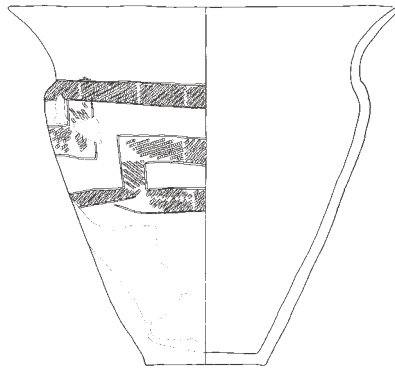


図 3 較正年代確率密度分布 (IntCa120, 0xCa14.4) 全測定 時期順

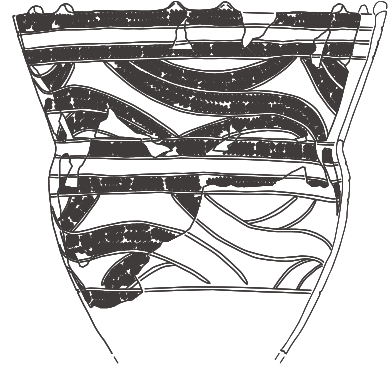
五輪野遺跡 (AOMB-231)



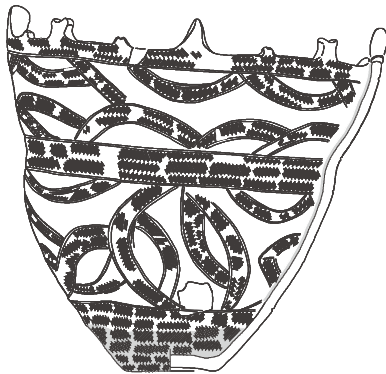
前坂下 (11) 遺跡 (AOMB-234)



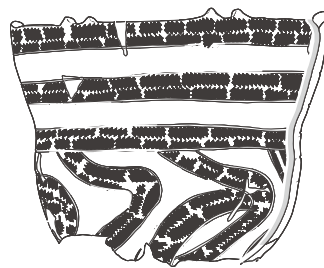
駒木沢 (2) 遺跡 (AOMB-240)



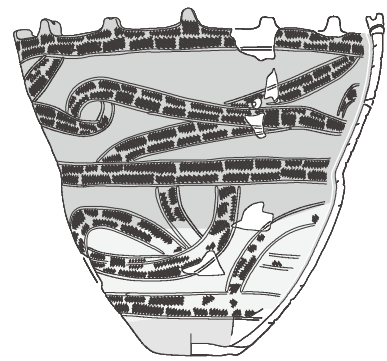
米山 (2) 遺跡 (AOMB-243)



米山 (2) 遺跡 (AOMB-244)



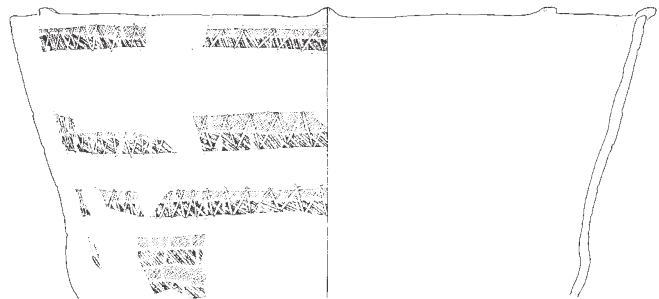
米山 (2) 遺跡 (AOMB-245)



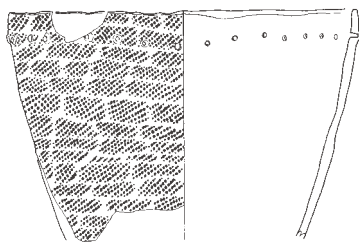
大湊近川遺跡 (AOMB-251)



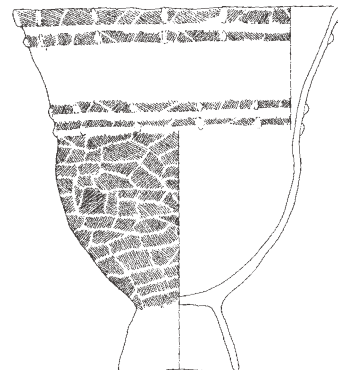
大湊近川遺跡 (AOMB-256)



大湊近川遺跡 (AOMB-257)



大湊近川遺跡 (AOMB-258)



0 1:6 10cm

図 6 分析試料

考古資料の普及・活用

木村 高*

1 はじめに ー普及・活用の必要性和青森県の現状ー

文化庁は『埋蔵文化財の保存と活用』(平成19年(2007)2月報告)の中で、発掘調査によって蓄積された埋蔵文化財を「地域づくり・ひとづくり」に活かす方向性を示し、平成30年(2018)6月8日公布の文化財保護法(一部改正)は、過疎化や少子高齢化などを踏まえ、未指定を含めた文化財を「まちづくり」に活かし、地域社会総がかりでその継承に取り組む必要性について述べている¹⁾。

①「地域づくり」、②「ひとづくり」、③「まちづくり」、これら3つの課題を実現するためには、他分野との連携はもちろん、多様な方法を組み合わせながら進める必要があるが、考古資料を用いた普及・活用は今後、どのようなかたちで行われるのが良いのか、人材と財源が不足していく中、どこまで進めることが可能か、各自治体の方向性と手腕が様々な局面で問われている。

全国の埋蔵文化財調査組織(いわゆる「埋文センター」等)や市町村教育委員会が実施している考古資料の「活用」と言えば「教育普及」が先ず挙げられる。それは基本的に、ア:視覚系(展示会・書籍等)、イ:視覚・聴覚系(説明会・見学会・講演会・シンポジウム・公開講座・出前授業等)、ウ:視覚・聴覚・触覚系(体験学習会等)などで構成され、これらの取り組みの中における情報経路は、アは基本的に一方向(対話なし)、イは双方向的(対話可能)、ウは体を使って自身が形成する情報(対話なし~対話可能)ということができる。いずれにしてもこれらの取り組みは②「ひとづくり」に直結するものであり、全国的にも安定的に実施されている。しかし、①「地域づくり」を主目的とした取り組みの事例は多いとはいえ、③「まちづくり」については「史跡整備」等のかたちで行われている例はあるものの、自治体の総数に対してはまだ少ない。このことから、今後の普及・活用には、①と③を重視した取り組みが必要となる。

令和4年から6年までの3年間、筆者は郷土愛醸成、地域活性化、人財育成を軸とした事業(青森県重点事業:「地元の縄文」再発見プロジェクト²⁾)に携わり、①「地域づくり」と③「まちづくり」に係る領域に注力したが、その実施過程で気付くことになったのは、考古資料の普及・活用を進めるにあたっての課題が青森県は非常に多いことである。

本稿では、それらの課題について私見を述べながらいくつかの対処策を提案する。また、上記3課題への今後の取り組みに生かされるよう、筆者がこれまで携わってきた普及・活用業務から学んだ一般市民・地域住民(「一般市民」と「地域住民」の中に「児童生徒」を含む)が示す「傾向」等を紹介する。

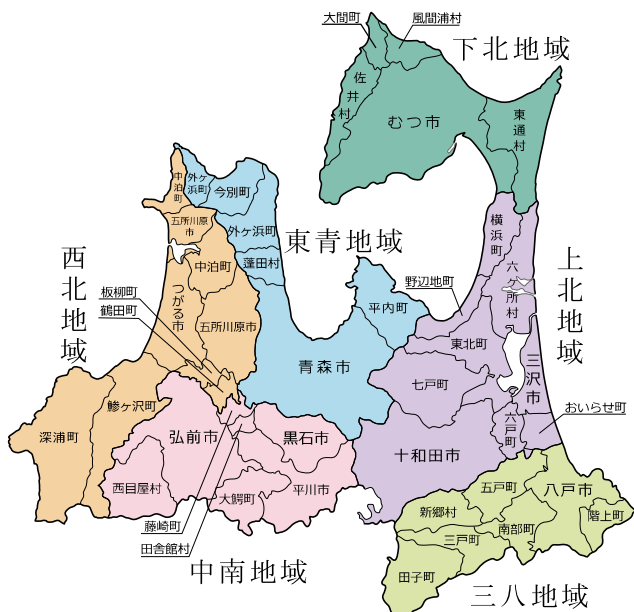


図1 6地域と40市町村の位置

* 青森県埋蔵文化財調査センター

なお、本稿の前半部分の記述は、基本的に現状の把握に主眼があり、特定の自治体や機関を批判しているものではない。現状の把握は今後の「地域づくり」と「まちづくり」を前向きに進めていく上で、最低限の基礎作業であり、この段階を経ずして課題解決に向かうことはできない。

2 考古資料の普及と活用が必要な理由

考古資料の特性—モノが持つ力—

地域に存在する「資料」を用いて「地域づくり」と「まちづくり」を進めるにあたっては、地域のアイデンティティを見いだすことがまず必要となるが、そのためには、その「地域にあるもの」を掘り起こすところから始まる。以下では、考古資料の普及と活用が必要となる理由について、筆者の考えをまず述べておきたい。

単刀直入に言うと、地域に根ざしていて、扱いがさほど難しくなく、地域住民を惹きつける力、ストレートに感動させる力をもつ、考古資料はこういった要素を非常に多く含んでいると考える。

あまり意識されていないが、考古資料と遺跡は青森県内の40市町村(図1)の全てに存在している。この事は、「地域づくり」と「まちづくり」を進めるにあたって有利である。また、「地域づくり」と「まちづくり」には、核となりうる複数の素材が必要となるが、地域の成り立ち、開始、ルーツなどを語る素材として考古資料は欠かせず、その地域の歴史の最初のページを飾るシンボルとしての存在にもなり得る。

しかも、それらは類例に恵まれていることから、地域住民に直接触っていただく等、取り扱いが容易である。そして何よりも、無条件で人を感動させる「古さ」であるとか、数千年の時を経て眼前に現れた「貫禄」もある。これらのことに加えて、考古資料の多くはモノ(出土品：遺物)であり、そのモノ自体が「当時の地元の様子」を直接証明する。モノこそ確実な物証であり、何にも勝る説得力があり、最近多用される言葉を使えば、エビデンスそのものと言うこともできる。多くの人を瞬時に納得させるモノこそ、「地域づくり」と「まちづくり」に相応しい。

土器の活用

考古資料のなかで最も活用しやすい素材は土器であり、その中でも縄文土器は最適である。縄文土器は、数千年前という「古さ」がもたらす物理的(わかりやすく言うと「骨董的」)な迫力(時間の流れの壮大さ)、「美しさ」がもたらす芸術的な魅力、「不思議さ」から発せられる神秘的な魅力、そしてさらには使用方法や文様が持つ意味などについて、(研究者ではない)地域住民も想像できる「自由さ」を許容している。また、名も無き当時の人々が遺したもの、という情緒的な面も併せ持っている。

視覚的要素、芸術的要素、想像をはるかに超える「古さ」…、多くの人々の感性を揺さぶりながら、その価値は理屈ではなく「心」に形成される。

つまり、縄文土器は完形品でなくても与えるインパクトが大きく、触ることで、数千年前の人たちが経験した触感を追体験することもでき、活用幅の広さと効果の深さが大きな強みである。

また、縄文土器は、県内40の全市町村、そして各市町村の各地から安定的に出土している。縄文土器の出土がやや少ない地区であっても、補完するかのように平安時代の土師器が充実していることが多い。土師器は縄文土器がもつ迫力には及ばないが、「約1,000年前」のキーワードを伝えるだけで一般市民の見方は変わる。以上が筆者が考える考古資料の普及と活用が必要な理由である。

3 展示施設と考古系専門職の関係

①「地域づくり」、②「ひとづくり」、③「まちづくり」を進めるにあたっては、地域のアイデンティティを形成するための拠点となる施設(建物)と、地元の文化財や歴史などに精通した専門職を置くことが必要となる。規模の大小は別にしても、1市町村に歴史博物館的な機能を持つ展示施設1館は欠かせず、さらに、その地域の重要な要素を地域住民に効果的に伝えることのできる専門職が最低2名は必要であると考えられる。

学芸員を含む考古系専門職は、約半数の県内21の市町村に在籍しており、40市町村全体の配置率は52.5%である(表1)。10市の配置率は100%であるが、30町村の配置率は36.7%と低い。これは、専門職が配置されていない町村は実に63.3%にもものぼる、ということである。

この状況に展示施設の有無を組み合わせてみると、考古系専門職が配置され、展示施設もある市町村は19市町村(47.5%・8市10町1村)、考古系専門職が配置されているにもかかわらず展示施設が無い市は2(5%)、逆に、展示施設があっても考古系専門職が配置されていない町村は9(22.5%)存在している³⁾。そして、専門職が配置されず、展示施設も無い町村は10(25%)にのぼる。

展示施設が無い2つの市の人口はあわせて約8万人近く、専門職が在籍せず、展示施設も無い10町村の人口はあわせて約5万人である。つまり、県全体でみると、展示施設が無い市町村の人口は実に約13万人にのぼる。

ただし、展示施設が無い12市町村の中でもいくつかの自治体は公民館などの施設の中で簡易なミニ展示を行っている。0と1とでは大きな違いであるように、このような取り組みは小規模であっても非常に重要である。展示ケースの入手やスペースの確保を着実に進め、地元のルーツや地域史に住民が関心をもつように働きかけることこそが、「地域づくり」、「まちづくり」にとって重要である。そのような取り組みを行っていない自治体は、早急に展示の計画を検討する必要がある。

考古資料は県内の40市町村の全てに存在しているにもかかわらず、活用についてはこのように、自治体ごとに大きな隔りがある。

「地域づくり」、「まちづくり」を進めるためには、考古資料以外の文化財や観光資源、地域の特色(他の市町村には無い要素)などを総合的に把握し、地域住民と一緒に考える体制が必要となるが、この前提として、遺物を適切に扱うことのできる考古系の専門職、民具と無形文化財に精通している民俗系の専門職、定説化した、

表1 県内40市町村における専門職と展示施設

地域	市町村	考古資料	考古系専門職	展示施設
東青	青森市	●	●	●
中南	弘前市	●	●	●
三八	八戸市	●	●	●
中南	黒石市	●	●	—
西北	五所川原市	●	●	●
上北	十和田市	●	●	●
	三沢市	●	●	●
下北	むつ市	●	●	—
西北	つがる市	●	●	●
中南	平川市	●	●	●
東青	平内町	●	—	●
	今別町	●	—	—
	蓬田村	●	—	—
	外ヶ浜町	●	●	●
西北	鱒ヶ沢町	●	●	●
	深浦町	●	●	●
中南	西目屋村	●	—	—
	藤崎町	●	—	—
	大鱒町	●	—	—
	田舎館村	●	—	●
西北	板柳町	●	—	●
	鶴田町	●	—	—
	中泊町	●	●	●
上北	野辺地町	●	—	●
	七戸町	●	●	●
	六戸町	●	—	●
	横浜町	●	—	●
	東北町	●	—	●
	六ヶ所村	●	—	●
下北	おいらせ町	●	●	●
	大間町	●	—	—
	東通村	●	●	●
	風間浦村	●	—	—
	佐井村	●	—	●
	三八	三戸町	●	●
五戸町		●	●	●
田子町		●	—	—
南部町		●	●	●
階上町		●	●	●
新郷村		●	—	—
		100.0%	52.5%	70.0%

※市町村の掲載順序は、地方公共団体コードに基づく。

固定化されたこれまでの地域史を再構築できる歴史系の専門職といった、学芸員的な職員の配置が必要となる。財政的な事情により複数名は難しくても、やはり最低2名は必置であろう。このような体制を整えないまま時間が過ぎ去ると、そこに住む地域住民はいつまでたっても「地域の誇れる部分」に気付くことができないままとなる。

専門職が配置されず、展示施設も無い自治体は、体制を整えている周辺市町村の取り組みを確認し、格差の縮小を意識した取り組みを早急に検討する必要がある。

4 展示について

考古資料の普及・活用の第一歩は「展示」であると筆者は考えている。展示は、資料を視覚的に提示することで、興味・関心を高め、理解を広げ、新たな思考を促す。中でも、実物はいかなる場合においても強い説得力を持ち、関連写真や図・表などと組み合わせられることによって、その効果はより高まる。ここに解説者との対話（質問⇔助言）が加われば、理解はより深まり、高い次元の学びの領域へと発展する。一般的に我々が目にする展示は、短期間で実施される「展示会」と長期間にわたって実施される「常設展示」とに分かれるが、以下ではこの2つの形態について考えてみる。

展示会

「展示会」とは、特定の場所に来場者を集め、限られた期間内で資料を展示するイベントの類であるが、県内40市町村のうち、考古資料の展示を定期的に行っている市町村は現状において十指に満たない。「展示会」で展示される資料というものは基本的に、そのイベントの実施主体の市町村出土品を含むかたちで構成されることが多いが、こういったイベントが実施されない市町村の住民は、地元の出土品を地元で見る機会に恵まれず、幅広く資料を集めた「展示会」を実施する他の市町村に出かけていかなければ地元の出土品を見ることはできない。もちろん、出かけていっても地元の出土品を見ることができる確証はない。地元市町村の専門職員が地元の施設で、資料を広域に集めた「展示会」を実施した場合は、地元で他市町村の資料も見ることができるが、このような例は希である。

常設展示

地元の出土品が常設展示されている（博物館的な）施設が地元があれば、他市町村にわざわざ出かける必要は減り、地域住民はいつでも出土品を見学することができる。では、県内における博物館等の設置状況はどのような状況にあるのか、確認してみたい。

表2⁴⁾は県内に所在する登録博物館(表区分:T)・博物館相当施設(表区分:S)・博物館類似施設(表区分:R)の一覧である。現時点において、県内40市町村のうち34の市町村(85%)に存在し、このうち28の市町村(70%)で考古資料を常設展示している。この70%という割合はそれほど悪くない数値に見えるが、30%の市町村に住む地域住民は、地元の出土品を見る機会に恵まれていないことを示しており⁵⁾、6市町村(15%)にはまだ博物館的な施設さえ設置されていない。この状況は早急に解決されなければならないのは当然であるが、応急的な措置としては、(耐震と防犯の両体制を備えた上で)町民文化祭などで毎年展示する、大勢を収容できる公民館や地域住民が定期的集まる公共施設に展示ケースを設置し、その中に展示する、地元の出土品を保管している県の機関(青森県埋蔵文化財調査センターなど)に出張展示を依頼する⁶⁾など、いくつかの方法が考えられる。

表2 青森県内博物館等施設一覧⁴⁾ (T: 登録博物館 S: 相当施設 R: 類似施設)

地域	市町村	区分	名称	考古	歴史	民俗	自然	植物	水棲生物	美術工芸	文学	その他	開館	備考	
東青	青森市	T	青森県立郷土館	1	1	1	1						1973	(県施設) 昭和48年4月1日登録	
		S	青森県立美術館								1			2006	(県施設)
		R	さんまるミュージアム	1										2010	(県施設)「三内丸山遺跡センター」
		R	青森市中世の館	1	1	1								1992	
		R	青森市小牧野遺跡保護センター	1										2015	「縄文の学び舎・小牧野館」
		R	あおり北のまほろば歴史館		1	1								2015	
		R	八甲田山雪中行軍遭難資料館		1	1								1978	
		R	青森市民美術館								1			1979	
		R	青森県近代文学館									1		1994	(県施設: 青森県立図書館内)
		R	東北大学植物園八甲田山分園						1					1929	(国立大学法人)
R	青森市森林博物館						1					1982			
R	青森県管浅虫水族館							1				1983	(県施設)		
中南	弘前市	T	弘前市立博物館	1	1	1							1977	昭和53年4月1日登録	
		S	高岡の森弘前藩歴史館		1									2018	令和4年1月28日登録
		R	弘前れんが倉庫美術館								1			2020	
		R	弘前城情報館		1	1								2018	(弘前公園二の丸内)
		R	山車展示館		1	1								1994	
		R	津軽藩ねぶた村		1	1								1981	
		R	鳴海要記念陶房館								1			2003	
		R	弘前市立郷土文学館									1		1990	「太宰治まなびの家」
		R	旧藤田家住宅									1		2006	
		R	弘前大学資料館										1	2012	(国立大学法人)
R	弘前城情報館		1									1988			
三八	八戸市	T	八戸市博物館	1	1	1							1983	昭和59年9月26日登録	
		R	八戸市美術館								1			2021	令和3年新美術館開館/令和7年6月17日登録
		R	八戸市埋蔵文化財センター	1										2011	「是川縄文館」
		R	八戸市縄文学習館	1										1994	「是川縄文館分館」
		R	八戸市立民俗資料収蔵庫		1	1								1977	(漁撈用具関係)
		R	八戸市南郷歴史民俗資料館		1	1								1980	
		R	榑引八幡宮国宝館		1							1		1934	
		R	洗心美術館								1			2010	
		R	八戸市水産科学館(マリエント)							1				1989	
		R	八戸植物公園					1						1981	
中南	黒石市	R	津軽こけし館							1			1988		
		R	秋田雨雀記念館									1		2009	(津軽黒石こみせ駅内)
西北	五所川原市	R	五所川原市市浦歴史民俗資料館	1	1	1							1989	(中の島公園内)	
		R	五所川原市太宰治記念館								1			1998	「斜陽館」
		R	津軽三味線会館										1	2000	民俗音楽
上北	十和田市	R	十和田市郷土館	1	1	1							1972		
		R	十和田市称徳館		1	1								2000	
		R	十和田市十和田湖民俗資料館		1	1								1978	
	三沢市	R	十和田市現代美術館								1			2008	
		R	三沢市歴史民俗資料館	1	1	1								1982	
		R	三沢市先人記念館		1	1								1995	
R	寺山修司記念館									1		1997			
R	青森県立三沢航空科学館										1	2003	(県施設) 航空史・航空科学		
下北	むつ市	R	北洋館		1	1							1981		
		R	むつ市海と森ふれあい体験館						1					2005	
西北	つがる市	R	つがる市森田歴史民俗資料館	1	1	1							1975		
		R	つがる市縄文住居展示資料館	1										1986	「カルコ」
		R	つがる市木造魚ヶ岡考古資料室	1										1979	
中南	平川市	R	平川市郷土資料館	1	1	1							1994		
		R	平内町歴史民俗資料館	1	1	1								1979	
東青	蓬田村	R	夜越山森林公園					1					1972	(サボテン園・洋ラン園)	
		R	蓬田村文化伝承館		1	1								2002	
		R	青函トンネル記念館										1	1989	土木技術・調査技術
西北	鯉ヶ沢町	R	むーもん館	1									2024		
		R	鯉ヶ沢町郷土文化保存伝習館光信公の館		1	1								1990	
		R	深浦町歴史民俗資料館	1	1	1								1980	
		R	風待ち館		1	1								2005	
		R	円覚寺奉納海上信仰資料収蔵庫		1	1								1987	(寺宝館)
		R	深浦町美術館		1	1					1			2006	
中南	西目屋村	R	「太宰の宿」ふかうら文学館								1		2004		
		R	十二湖エコ・ミュージアムセンター					1			1			1999	「湖郷館」
		R	白神山地ビジターセンター					1						1998	(県施設)
		R	常盤ふるさと資料館あすか								1			1996	
		R	田舎館村埋蔵文化財センター	1										2000	
		R	田舎館村博物館								1			2000	
西北	板柳町	R	板柳町立郷土資料館	1	1	1							1973		
		R	中泊町博物館	1	1	1								1998	
R	小説「津軽」の像記念館									1			1996		
上北	野辺地町	R	野辺地町立歴史民俗資料館	1	1	1							1981		
		R	絵馬館		1	1								1994	
	七戸町	R	ニッ森貝塚館	1										2021	
		R	七戸町立鷹山宇一記念美術館								1			1994	
		R	スペイン民芸資料館									1		1994	
		R	Nonoue人形の家									1		2005	
	六戸町	R	六戸町郷土資料館	1	1	1								1981	
		R	横浜町郷土館	1	1	1								2025	
	六ヶ所村	R	東北町歴史民俗資料館	1	1	1								1993	
		R	六ヶ所村立郷土館	1	1	1								1991	
おいらせ町	R	おいらせ阿光坊古墳館	1										2017		
	R	おいらせ町民ふれあい館		1	1								2001		
	R	大山将棋記念館										1	2005		
下北	東通村	R	東通村歴史民俗資料館	1	1	1							2013		
		R	佐井村海峽ミュージアム	1	1	1								1990	
三八	三戸町	R	三戸町立歴史民俗資料館	1	1	1							1967	(城山公園内)	
		R	五戸町	1	1	1								2018	
		R	南部町	1	1	1								2017	
		R	階上町	1	1	1								1983	

青森県文化財保護課のWebサイト「青森県内博物館等施設一覧」(更新日付: 2025年6月17日)を加筆修正して作成。同一一覧表への掲載がまだ行われていない施設は区分欄を空白とした。 ※市町村の掲載順序は、地方公共団体コードに基づく。

展示施設のもう一つの役割

しかし、資料の収蔵と保管の機能を備えない施設の中でこの応急的処置をいたずらに長期化させた場合、地域住民の中には「資料の収蔵と保管」という概念が形成されにくくなり、自分が所有している地元の出土品をどこに届けばいいのか、どこが受け取ってくれるのか、分からないまま時が過ぎ、散逸しやすい状況に陥る。この状況からも、博物館的な展示施設が無い状況、専門職不在の状況は早急に解決されなければならない。

参考までに述べると、日本の縄文時代草創期を語る上で欠かすことのできない大平山元遺跡(外ヶ浜町)や長者久保遺跡(東北町)の発見は、地元の中学生在が発見した石器が発端となっている。つまり、この大きな成果は、地域住民である中学生と、同じく地域住民である考古資料に詳しい人物がたまたま出会うことで実ったのである⁷⁾。

県内各地の地域住民が所有している考古資料の中には、博物館で展示されるべき優品が数多く含まれ、中には考古学界が驚愕するレベルのものもある。また、かつて多くの書籍に掲載されていた「有名品」も、いつの間にか所有者の世代交代により、行方不明になったケース、遠方へ売却されてしまったケースもある⁸⁾。

このような状況を踏まえると、収蔵スペースと保管機能を兼ね備えた展示施設を持ちつつ、考古系の専門職(学芸員含む)を常駐させる意義はきわめて大きい。考古系の専門職(学芸員含む)が常駐していれば、地元の出土資料を寄付や寄託等の手続きによって保管することができ、長期借用の手続きをするだけでも、散逸を防ぐことが可能となる。施設の設置と専門職の配置を早急に行わなければ、地域のタカラは自然に消失していくこととなる。

県内の博物館

県内の博物館について若干補足すると、登録博物館(表2のT)とは、博物館法の規定によって登録された「博物館」であり、学芸員の必置が義務づけられ、資料の収集、保管、展示といった基本的業務とともに、来館者への説明、助言、指導、資料に関する調査研究、解説書や図録、研究年報等の作成、講演会や研究会等の開催などが必要な事業とされている。これこそがまさに本格的な博物館と言えるが、残念な事に、県内に存在する登録博物館はわずか5館を数えるのみであり、この数は現時点において全国最下位(表3)となっている⁹⁾。そしてさらに残念であるのは、この事実がほとんど知られていないことである。

博物館相当施設(表2のS)は、登録博物館に類する事業を行う施設であり、法的な規制の外にあることから、個人でも団体でも運営は可能であるが、学芸員については「相当職員」を置く必要がある。県内には今のところ2館しかなく、その他多くの施設は、次に述べる博物館類似施設である。

表3 全国の人口と登録博物館の数⁹⁾

都道府県	人口 (単位千人)	登録博物館 の数	順位
東京	14,178	75	1
長野	1,987	73	2
北海道	5,043	52	3
千葉	6,251	42	4
神奈川	9,225	36	5
富山	997	35	6
愛知	7,460	34	7
岡山	1,831	31	8
兵庫	5,337	30	9
静岡	3,527	29	10
京都	2,520	29	11
広島	2,714	29	12
福岡	5,092	27	13
埼玉	7,332	26	14
新潟	2,099	26	15
石川	1,098	26	16
大阪	8,757	26	17
栃木	1,885	23	18
島根	642	21	19
岩手	1,145	20	20
山梨	791	20	21
群馬	1,890	19	22
福井	739	19	23
三重	1,711	19	24
愛媛	1,276	18	25
茨城	2,806	17	26
岐阜	1,916	16	27
滋賀	1,402	16	28
山口	1,281	16	29
福島	1,743	14	30
奈良	1,285	14	31
山形	1,011	13	32
香川	917	13	33
鹿児島	1,532	13	34
熊本	1,697	12	35
宮城	2,248	11	36
佐賀	788	11	37
沖縄	1,466	11	38
和歌山	880	9	39
鳥取	531	9	40
秋田	897	8	41
徳島	685	8	42
長崎	1,252	7	43
大分	1,085	7	44
宮崎	1,033	7	45
高知	656	6	46
青森	1,165	5	47

※着色は北海道と北東北3県
※人口は2024年10月1日現在

博物館類似施設(表2のR)は、博物館法に基づく登録や指定を受けていない施設であり、県内の多くはこの分類に収まっている。学芸員の設置義務は無いことから、県内の歴史民俗資料館など、博物館類似施設のほとんどは(その資料館を運営する自治体に学芸員資格を持つ考古系の専門職が在勤していても)学芸員不在の状態にある。つまり、見学してもその場で質問に対する回答は得られない状況が一般的である。よって、学校における授業の一環として資料館を訪れる場合などは、事前に打ち合わせて、訪問日に考古系の専門職に来てもらうなどの調整を図るなどの必要がある。

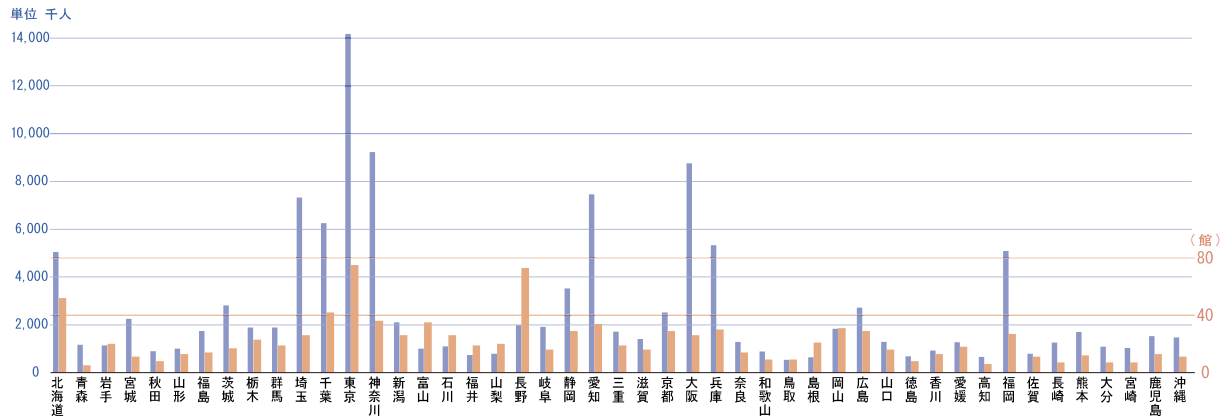


図2 全国の人口と登録博物館の数⁹⁾ (■人口 ■博物館)

5 考古系の専門職について

上述の内容に引き続き、県内における考古系の専門職(学芸員含む)について述べる。普及・活用という業務名はシンプルであるためか、世間一般はこの業務そのものを簡単、単純と捉えがちである。しかし、普及・活用は、資料の収集・保存・管理・調査・研究…といった地味な業務の積み重ね、組み合わせがあってはじめて実現可能となる。普及・活用(イベントや展示など)をやるために資料の収集・保存・管理・調査・研究をする、という手順は実は逆である。甚だしい誤解は、資料の収集・保存・管理・調査・研究をそれほどやらなくても何とかできる、という認識も青森県にはよくみられる。これら一つ一つの業務は手間と時間が非常にかかるが、このことは専門職以外にはあまり理解されていない¹⁰⁾。また、「学生時代に歴史学を専攻していた人は、考古学もできるだろう」と誤解されたり、「考古学は年代や事象の刻み幅が大きく、主要人物もそれほど登場しないから歴史学よりも容易であろう」、という誤認も少なくない。また、最近はあまり接する機会が無くなったが、考古学は刷毛をつかって宝を探す、土器を接合する…それが業務のメイン、発掘事業の予定がなければ専門職は採用しなくても良い、という古い認識も未だに残っている。

しかし現在は文化庁が言うように、発掘調査によって蓄積された埋蔵文化財を、①「地域づくり」、②「ひとづくり」、③「まちづくり」に活かす時代、活かさなければならない時代である。蓄積された埋蔵文化財を普及・活用して「地域づくり」「ひとづくり」「まちづくり」につなげるためには、資料の収集・保存・管理・調査・研究…が先に行われている必要がある。

考古学の知識や情報を蓄え、それを多くの面前で流暢に説明できる人物がいたとしても、その知識や情報がバラバラで体系化されていない場合は、単なる「物知り」でしかなく、「地域づくり」「ひとづくり」「まちづくり」にはつながらない。つまり、蓄積された埋蔵文化財に付随する考古学的な情報を地

域住民が理解しやすい内容にかみ砕き(咀嚼)、体系化することができなければならない。考古学の世界で行われる「考古学的研究」の成果は、教育学の世界で行われる「教材研究」のようなフィルターを通してはじめて、地域住民は学術的な資料を地域のタカラとして認識できるようになる。

この「教材研究」のようなフィルターの「キメ」を細かくする段階では、学術的な専門知識に乏しい人からの意見に耳を傾けることも重要であり、この段階で専門用語は一般的な話し言葉の中に溶け込んでいくこととなる。

なお、①「地域づくり」、③「まちづくり」に活かすための準備作業として、筆者は下記のような段階を踏む必要があると考えている。①「地域づくり」、③「まちづくり」が成功するかどうかは、B段階以降に必要となる他分野との連携のほか、近隣市町村との情報交換¹¹⁾などが大きな鍵になるだろう。

表4 考古資料を「地域づくり」「まちづくり」に活かすための準備

A段階	考古資料を整理(接合、台帳作成など)し、考古学的情報を最新の成果に照合
B段階	考古学的情報を地域住民が理解しやすい表現に変換
C段階	地域住民の現在の生活、親世代(過去)の生活、予想される未来との接点を見いだす
D段階	地域の過去(歴史)について住民に説明し、現在と未来を考えるきっかけを提供

B段階以降は、他分野との連携、近隣市町村との情報交換などが必要。

しかし、これまで述べてきたことに着手しようにも、それが物理的に不可能な市町村も存在する。これは市町村間でかなりの格差があるが、発掘調査を実施している市町村の専門職の多くは、発掘調査そのものに翻弄され、調査後は出土品の洗浄・注記・接合・実測図作成・写真撮影・線画と写真画像の図版作成・観察表作成・文章執筆…校正といった発掘調査報告書の作成業務がある。さらにこの業務以外にも土木工事に伴う立ち会い調査や調整、予算関係の業務など、普及・活用に着手しようにも物理的に不可能な状態に陥っている市町村もある。発掘事業が常に続く市町村は最低でも、3名以上の専門職を配置しなければ普及・活用は難しい。

6 考古資料の普及・活用の問題点

これまで実施されてきた普及と活用は、展示や講演会・体験イベントなど、行政側が主体的に行う取り組みと、出前授業や見学受け入れなどのリクエストに応じるかたちの取り組み、この2種に大別されるが、これを対象者で分けた場合、児童生徒を対象とした学校教育(出前授業や展示見学など)と、青少年および成人を主な対象とした社会教育(講演会・展示会・遺跡見学会など)に分かれる。

学校教育

児童生徒を対象とした出前授業や展示見学の申し込みは、拡張的・発展的な教育活動として高く評価されるものであるが、これは、たまたま地元自治体に考古学の専門職が在勤していて、たまたま近くに考古資料の展示・保管施設があって、社会科(歴史)の授業に考古資料を組み込むことに前向きな学校にたまたま在学した場合に限って成り立っている。

つまり、出前授業や見学受け入れは、このような複数の偶然が重なった場合しか実施できない、ということである。遠方の展示施設に出かけて資料を見学する、あるいは遠方から専門職に来てもらって解説してもらおう、これはそのまま社会科(歴史)の勉強にはなるが、地域研究であるとか、郷土愛の醸成であるとか、地域に根ざした教育への貢献はあまり期待できない。

ウェブサイトにおける実施報告や新聞・テレビ等での紹介により、出前授業や見学受入は安定的に行われているかのように見えるが、県全体の児童生徒数に照らすとそれほど多くは行われていない。

現状において、地域の資料を素材にした、拡張的・発展的な教育を受けている児童生徒は非常に少ないが、学校教育との関係以外においても、「ひとづくり」は、「地域づくり」、「まちづくり」の基盤であることから、近くに考古資料を展示・保管している施設が無く、専門職もいない状況については、近隣市町村や県との協力関係⁶⁾を早期に構築するなど、連携を深めつつ、バス移動のための予算措置など、前向きに取り組む必要がある。

社会教育

一方、主に青少年および成人を対象として行われてきた講演会や展示会などについても見直されなければならない部分がある。それは、これまでは「考古学や歴史が好きな人」に来ていただく、というあまり戦略的とは言えない、漠然とした感覚の中で実施されてきたことである。

上述の児童生徒たちは、学校側の方針、あるいは拡張的・発展的な授業に前向きな教師の働きかけなどによって、児童生徒は(良い意味で)強制的に学ばされるのであり、それは教育戦略として正しい方向性であるが、社会人対象の講演会や展示会などの事業は、「歴史が好きな方達に情報や知識を定期的に提供する」かたちで実施されるものが多く、そこから何かにつなげていく戦略性は意識されていないように感じる。教育現場には様々な目標があり、そこに向かって多様な教育活動が展開されていることから、行政が実施する社会教育の施策については、「地域づくり」、「ひとづくり」、「まちづくり」を意識しながら進めていく必要があるのではないだろうか。

7 書籍と展示

書籍については、各自治体発行の市町村史や博物館・資料館が作成した図録等があり、図書館や公民館で閲覧が可能である。しかし、それらの存在に気付いている地域住民はそれほど多くなく、しかも内容は地域住民が簡単に理解できるようにはなっていないことが多い。こういった書籍は主に郷土史家や歴史系の研究者が活用するものとなっているが、地域住民のためにクローズアップすべき事項は意外に掲載されていることから、こういった部分を的確に抜き出し、先に述べたB段階以降の作業を行えば、埋もれていた情報を復活させることができる。『青森県史資料編考古1～4』¹²⁾は、図や写真が豊富であることから、これを利用すれば専門職をまだ採用していない自治体であっても、簡易に“内容に問題の無い”パネルを製作・展示することが可能である。これに少量の出土品を組み合わせれば、遺跡の存在を知らなかった地域住民、地元出土品を見たことのなかった地域住民は大いに喜ぶ。この取り組みはさほど予算をかけずに実施できるので、前向きに検討していただきたい。

8 一般市民・地域住民の「傾向」

筆者はこれまで、発掘調査現場や博物館などで多種多様な普及・活用業務に携わり、令和4～6年(2022～2024)の3年間は、県内全域における①「地域づくり」、②「ひとづくり」、③「まちづくり」を後押しする事業(青森県重点事業:「地元の縄文」再発見プロジェクト²⁾)を現所属で実施した。こういった様々な業務から学んだものは無数にあるが、ここではその中から一般市民・地域住民が示す指向性や好みなどのパターンや傾向について若干紹介し、今後の普及・活用のヒントにしていだければと思う。

土器について

遺物の展示となると土器が主体になりがちであるが、土器については数多く展示すればするほど「素通り率」は高くなる。むしろ、器形のバラエティを増やすことに注力し、「使用方法」に関するイラスト等があった方が興味をかき立て、滞留時間は長くなる。

また、興味・関心の度合いを性別でみると、これは圧倒的に女性の方が高い。見るときの態度が真剣で、滞留時間が長く、男性とは明瞭な差がある（要因は不明であるが、陶芸教室に通う人は一般的に女性の方が多いことと関連があるのかもしれない）。このようなこともあり、素材粘土の採取場所や入手方法についても関心が高い。因みに、回転糸切痕を持つ平安時代のロクロ土師器に対する興味も高く（1,000年前にロクロが存在していたことに驚く）、須恵器の硬さの理由や大甕の製作方法などにも興味を示す（ただし、五所川原産須恵器の広域流通に関しては意外に淡泊な反応である）。性別による土器の種別ごとの好みは、縄文土器は男女ともに好む傾向にあり、土師器は女性が好む（飾りの多い縄文土器は、やや不気味に感じる方もいる）。

なお、よく質問を受けるのは「石膏」についてである。白い石膏部分を土器の一部と勘違いする人は意外に多く、その部分を綺麗だと言って、石膏の多い土器を気に入る方もいる。よって、展示にあたっては石膏に彩色を施しておいた方が良い。

石器について

石器については、静かに見ている方が多い。踏み込んだ質問はあまり出されないが、本当に切れるのか、本当に刺さるのか、という単純な疑問を抱いている方は意外に多い。質問された場合は、黒曜石で自分自身が手を切った体験談や、黒曜石の成分はほとんどガラスと変わらないこと等について話すことで納得いただくことができる。また、石鏃についても刺さるかどうかが疑問に思っている方が多いため、令和5年(2023)以降の「地元の縄文」再発見プロジェクト²⁾の体験コーナーでは、弓矢をメニューに加え、それを体験した方は先端に鏃を着けていなくても予想以上に貫通力があることに驚き、間違いなく刺さることに深い理解を示していた¹³⁾。

石材への興味については黒曜石が圧倒的である。これはゲーム(Minecraftなど)の影響があるようで、特に小学生の関心度はかなり高い。また、それが「採れるところ」にも興味津々である。「青森県ではつがる市の出来島海岸で拾える」ことを伝えるとかなり喜んでいただくことができる。黒曜石製石器は意図的に展示した方が良い。

なお、性別による興味・関心の度合いについては、圧倒的に男性の方が高い。ただしそれは主に「石材」「製作技術」「加工技術」への関心であり、機能についてはそれほど拘らない。よって、押圧剥離の方法や工具としての骨角器の硬さなどの話題を出すようにしているが、鹿角製ハンマーや棒状の鹿角などはなかなかイメージが難しいようであるので、製作・加工の方法については実験考古学で撮影された動画などがあれば喜ばれるであろう。

礫石器については予想以上に興味を示す。石器とは思えないこんな「石ころ」がなぜ石器なのか、というところが興味の源であるようで、川原石との違いを教えてもらうと目から鱗が落ちるかのようになり、かなり深く納得していただくことができる。また、楕円形の礫を手に持ち、実際にクルミやトチなど木の実を割る体験では、実験考古学的な要素もあってかなり喜んで頂くことができる。また、石皿はただ置いておくだけで「なぜこれが石器なのか」と、かなりの興味(疑問)を持つ。磨石とセットで展示するよりも離しておいた方が知的好奇心をかき立てることができる。

土偶について

種別に限らず、美術的に優品とされているもの、美しいものについては確かにじっくり見学するが、遺存状態があまり良くななくても、土偶については別格の扱いで見入る。全身が揃う完形品に近いものよりも、頭部だけを集めた集合展示の方が顔を比較する面白さがあるようで、滞留時間はかなり長くなる。それら一つ一つの土偶頭部は、「1点展示」には不向きであっても、集合展示になると惹きつける力は圧倒的である。

装身具について

装身具の中でも特に石製の玉については、その穿孔方法に対する興味・関心が強く、じっくり見学した後に質問されることが多いので、解説者は穿孔時の動作をジェスチャーで説明できるようにしておいた方がよい。ただし、管玉に関する穿孔技術に関しては、イラストや補足写真等を準備しておいた方が無難である(ジェスチャーでは難しい)。

素材については宝石系、すなわちヒスイやコハク等への関心が高い。しかし、生産体制や運搬経路(「糸魚川から運ばれてきた云々」)などの話題にはそれほど深い関心を示さない。これは、既に知っている方が多くなった可能性もある。むしろ、色や美しさの理由(鉱物組成につながる話)、装着の方法(体のどの部分に着けたか、紐の通し方、紐そのものなど)、どういった階級の人が入手できたのか等、素朴な質問が多い。

耳飾りについては珠状、栓状ともに関心が高い。それはデザインや製作技術に関してでは無く、「装着の仕方」である。いわゆる太鼓状のものや大型品に関しては、民族事例の話題を出さなければ理解できない。耳たぶの穴を大きくしすぎて、耳たぶが切れてしまった民族事例などの話題を出すると直ぐに理解に達する。

その他

成人は人骨を気味が悪いと嫌がるが、児童は非常に喜ぶ(バイアスが無いためであると思われる)。

幼児・園児は、同じ内容の画像であっても、パワポ画像よりは紙芝居の方が集中力が高い(低年齢であっても、スクリーン慣れが進んでいる可能性がある)。

精神遺物に対しては女性の方が関心が高い。

遺構について

遺構の写真については、鮮明な完掘写真であっても、発掘現場を見たことがない方はそれを平面におきかえることが難しく、重複遺構の存在や、影が無い写真などは特に理解することが難しい。

記録保存の写真としては議論の余地があるが、白線による輪郭への着色、明瞭な影、この2要素を写し込んでいる方が理解しやすいので、調査期間に余裕があれば、白線+影バージョンの撮影も行った方がよい¹⁴⁾。なお、遺構についてしっかり説明するためには、平面図と断面図がセットになった実測図を示し、写真はそのイメージとして副次的に用いた方が理解度は高い。ただし、遺構配置図については、実測図よりも航空写真の方が効果が高い。

現地見学会などで遺構の説明をする際は、一人が指示棒を持って説明、もう一人が画板に写真やキーワードを貼ったボード(A2判程度)を何枚も持ち、紙芝居方式を加えながら進める方法が効果的である。また、炉やカマドについて説明する際は、座ったり、しゃがみ込んだりして、居住者の(推定)姿勢を演ずるとすぐに納得していただくことができる。

写真について

展示スペースの都合もあるが、写真は美しいもの1枚よりも、1つの被写体に対して2枚あった方が理解度が高い(特に遺構)。土偶などは裏面の状態を知りたいがあるので、写真で補完するのが良い。

図について

パネルでもパワポでも、写真が続くと飽きるので、所々に図やイラストをなるべく挟むほうが良い。建物跡は半分を透過させた推定復元図、墓は人体を組み込んだ埋葬後の断面図、落とし穴はシカが溝状土坑に落ちた図、底面に逆茂木がある土坑にイノシシが落ちて逆茂木が刺さった図、土器は内部で食材が煮炊きされている図、装身具は頭部、胸部、胴部に装着した状態の図、

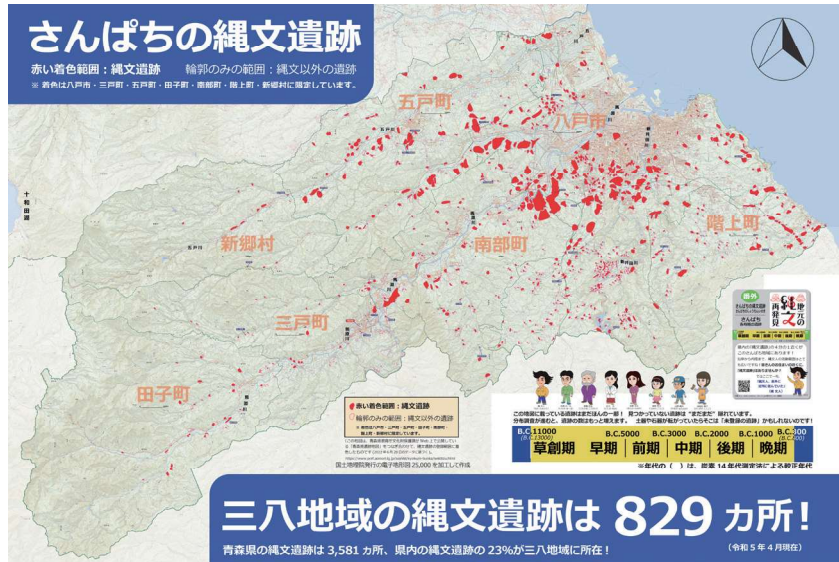


図3 巨大な地図(「青森県遺跡地図」をつなぎ合わせて製作:W2600mm×H1750mm)

石器は着柄した状態と使用時の動作が分かる図…などが効果的である。これらのイラストがあれば、滞留時間はかなり長くなる。なお、青森県遺跡地図¹⁵⁾をつなぎ合わせた「巨大な地図」(図3)は、かなり人気があった。自分の知っている場所との位置関係を確認しながら遺跡の位置を知るのが楽しいようであり、身近なところ、普段通っている道路の近くに遺跡があることを知っていただくにはこれが最適である。

グラフ

縄文時代の展示¹⁶⁾を博物館で行った際、アンケート結果から意外なことが判明した。数多く展示した優品資料よりも、図4の気候変動関係のグラフ3点¹⁷⁾への関心が非常に高かった。地球規模の気候変動が縄文時代にも起きていたことに驚きを感じたものと思われるが、このことから言えるのは、現代が直面している課題と関係する要素が含まれるものに対しては特別な関心をもつ、ということである。つまり、インパクトの強い情報は現代と比較できる要素をもつもの、我々が見慣れてしまった情報は、一般市民にとっては新鮮な場合もある、出土品ばかりに固執した展示は再考される必要がある、パネルだけでも相当な効果を生むことがある、ということである。

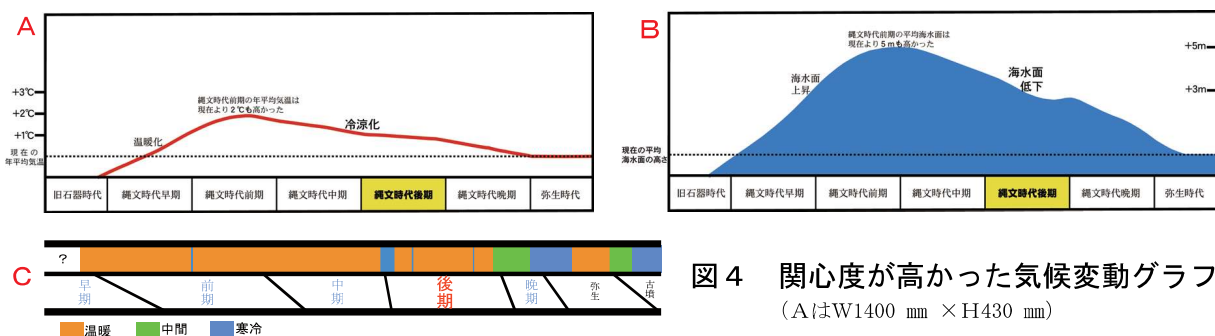


図4 関心度が高かった気候変動グラフ (AはW1400mm×H430mm)

9 「地元の縄文」再発見プロジェクトの紹介

冒頭でわずかに触れたが、令和4年(2022)から6年(2024)までの3年間、筆者が携わった郷土愛醸成、地域活性化、人財育成を軸とした標記の事業²⁾について紹介したい。

この事業の実施主体は青森県埋蔵文化財調査センターであり、対象は、40市町村すべての青森県民である。目的は、縄文時代の出土品を活用した展示会・体験学習会・講演会とシンポジウムの開催、カードの配布、インターネット配信、教材の制作と配布等を通じ、身近にある「地元の縄文」の価値や魅力を県民にわかりやすく伝えるとともに、青森に生まれた子ども達が「青森の縄文にふれた原体験」を誇りに思うことで、郷土愛の醸成、地域の活性化、多様な人財の育成につなげることである。

これらの取組において常に念頭においたのは、「全40市町村に縄文がある」、「関心層」よりも「無関心層」へ、「学ぶ」から「楽しむ・考える」である。

取組の内容

取組の内容は、「地元の縄文」の活用促進を目的とする「取組1」と、「地元の縄文」の魅力の再発見と情報の発信を行う「取組2」で構成され、取組1は県(青森県埋蔵文化財調査センター)と市町村が連携して活用の仕組みを構築していくための地域連携会議の開催、教材の制作～市町村への配布。取組2は、「地元の縄文」再発見フェアの開催とあおり縄文カードの作成、インターネットによる縄文遺跡と出土品の紹介である。

表5 事業の構成 (令和4年度～6年度)

取組名		実施内容	
取組1	活用促進	地域連携会議の開催地域(2回/年) 令和4年度：下北地域・中南地域 令和5年度：三八地域・西北地域 令和6年度：上北地域・東青地域	教材の制作地域(基本60セット/年) 令和4年度：下北地域・中南地域 令和5年度：三八地域・西北地域 令和6年度：上北地域・東青地域
取組2	魅力再発見 情報発信	再発見フェアの開催地域(2回/年) ・出土品展示会・体験学習会 ・講演会とシンポジウム 令和4年度：下北地域・中南地域 令和5年度：三八地域・西北地域 令和6年度：上北地域・東青地域	情報の発信対象地域 ・あおり縄文カードの作成 ・インターネットによる情報発信 令和4年度：県内全域 令和5年度：県内全域 令和6年度：県内全域

教材の制作

社会科の授業や地域研究等で活用可能な教材「あおり縄文遺物セット」を制作した(写真1)。全て実物で構成されていることから、視覚と触覚で「縄文」を体感することができる。1セットの内訳は土器片40点(児童生徒用)、やや大きめの土器片2～3点(指導者用)、石器10～12点(石鏃・石匙・不定形石器・磨製石斧・凹石等)、取扱説明書3部である。これを180セット制作し、県内全ての市町村教育委員会に配布した(使用した遺物は、全て報告書に掲載されなかったものである)。

制作から活用までの流れについては、青森県埋蔵文化財調査センターが制作・配布→各教育委員会が保管→小・中学校で使用(学校は地元の教育委員会から借りる：地元教育委員会は学校に貸し出す)とした。

実際に触った児童の反応としては、既存の知識やイメージとのギャップがかなり大きい分、理解の深化や喜び、感動、探求欲の向上(モチベーションのアップ)などにつながっている。教科書では到達し難い領域に



写真1 実物で制作した教材

思考を拓げることができる点は、まさに実物が持つ力、実物からしか得られない効果と言えよう。

再発見フェアの開催

多くの世代が「縄文」を①見て、②触って(遊んで)、③考えることができる内容とした。県内の6地域で開催した。全般にカジュアルな雰囲気を心がけ、県民との距離を縮めるようにした。キャッチフレーズは、「縄文人 意外に近所に 住んでいた」である。

① 出土品展示会（写真2）

ガラス越しの存在だった出土品を間近に見ることができるよう、露出展示を基本とした。展示は通史的にせず自治体毎とし、観覧者が地元の出土品をじっくり見ることができるようにした。地元の出土品を初めて見たという方は多く、出土品そのものに対する感動よりも、「地元にもある」事実を知って喜ぶ方はかなり多かった(地元で縄文は無いと思っていた方は多い)。



写真2 出土品展示会

② 体験学習会（写真3）

地元から出土した土器や石器に直接触る、実物の土器の拓本を採って缶バッジにする、クイズ(土器を古い方から新しい方へ並べる)を解くなどの静的な体験に加え、木の実割り、火起こし、弓矢など、動的なメニューも組み合わせて、複数世代が一緒に楽しめる内容とした。木の実割りと弓矢は人気メニューとなり、割れる音、刺さる音とともに、その物理的な威力に驚き、感動していた。



写真3 体験学習会

③ 講演会・シンポジウム（写真4）

地元研究者による講演と事例報告、シンポジウムでは「地元の縄文」に特化した考古学的議論と縄文遺物を素材にした活用案(グッズ作成など)の提示などを行った。議論では「食」や古環境など、現代と関連する話題を多く取り上げ、「過去の地元の意外性」に気づいていただくとともに、活用案では土偶を素材にしたグッズの提案が多く出された。



写真4 シンポジウム

あおり縄文カードの作成（図5）

自分の住む地域にもすばらしい縄文遺跡があることを知っていただくためのツールとして、全40市町村の出土品をカード化(263種)し、県内全域に無料配布した。裏面に小写真・年表・QRコードを配し、解説は人物イラスト(センターの職員や近所の子どもをイメージ)や被写体(考古資料)が直接つぶやく体裁とした。その内容は非常に「ゆるい」ものであるが、「見所」や「価値」のような情報のほか、人間としての共通性に気付いていただくように心がけた。配布場所には道の駅や各種公共施設等も組み込み、無関心層～低関心層への興味喚起を試みた。結果的にはかなり好評を博し、「カードで地元の遺物の



図5 あおり縄文カード（左：令和4年度 中央：令和5年度 右：令和6年度）

存在を知った」「このカードがなければ県内全域に足を運ぶことはなかった」「歴史民俗資料館には予想以上に“いい”考古資料があって驚いた(農具がメインだと思っていた)」「県内外のお客さんが増えてありがたい」「もっと発行してほしい」などの声をいただいた。熱心に収集し、いろいろなことを調べ始めた児童生徒もみられ、地域の「ボランティアガイド」として活躍する小学生も生まれてきている。

ホームページによる情報発信

「あおもり縄文カード」の画像と解説を発信した。ホームページでは、カード化された出土品の写真を表に組み込み、①全ての種別を地域ごとに見る、②特定の種別(土器、石器、土偶・岩偶、土製品・石製品、動植物素材)を時期ごとに見る、③特定の種別を地域ごとに見ることができるようにした。

これにより、出土品の移り変わりを知ることができたり、他地域で見ついている同時期の出土品と比較できるなど、時間と空間を軸にした検索結果を表示させることで、興味・関心の方向性をやや科学的に広げられるようにした。また、それらの出土地点(遺跡)をグーグルマップにプロットし、縄

文人は意外に近所に住んでいたことや、出土遺跡は既設の道路等と重なっていることなどをリアルに実感できるようにした。



図6 ホームページ
(左：時期ごと 中央：個別 右：出土地点)

10 おわりに

普及・活用と言っても様々なカタチがある。ざっと周りを見渡すと、入館者・来場者を増やすことを第一目標に掲げた展示・展示会は数多い。遠方から優品、珍品、貴重品を運び込み、多額の費用をかけた展示ならば当然のことであろうが、こういった展示のカタチ(スポットライトを浴びる芸術的な考古資料、世界遺産になった遺跡出土の重要文化財、最古、最大…)を基準にしすぎるあまり、身近にある考古資料を「ランクの低いもの」「ありふれたもの」…と見なすようになってはいけない。

「あっこ(あそこ)はむがしから土器、いっぺ埋まってるご(所)だんだ」「なんでこんな田舎にたくさん人が住んでたんですか?」「なんぼ(いくら)頑張ってもむがしの人さは勝でね～な～」…わずかに数点の土器・石器、遺跡地図や遺構配置図があればこういった会話ができる。地域住民は地元の意外な面を知り、地元の「元々の姿」を想像し、考える。「この人達って冬、どうやって暮らしてたの?」「あそこの川で魚、とってらったと思う」…疑問と推定が活発に飛び交い、ミニ・シンポジウムさながらである。普及・活用とは、何かを教え込むことではなく、こういった「きっかけ」を提供することから始めるべきであると筆者は考えている。

考古資料は研究者の占有物ではない。しかし地域住民はそれを自分たちのものであるとは思っていない。自然に形成されてきたこの構造をまず壊し、先人から引きついだタカラを①「地域づくり」、②「ひとづくり」、③「まちづくり」に活かす取り組みを県全体で早急に始めなければならない。

註

- 1) このことは、文化庁 2007『埋蔵文化財の保存と活用（報告）―地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政―』、「文化財保護法及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」（法律番号：平成 30 年法律第 42 号、公布年月日：平成 30 年 6 月 8 日）の「概要」(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/pdf/r1402097_01.pdf)に記載がある。また、文化庁は継続性・一貫性のある文化財の保存・活用を促進するための「文化財保存活用地域計画」などに関する指針も示している。(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/bunkazai_hozon/index.html)
- 2) 青森県埋蔵文化財調査センター刊行の『研究紀要』第 28 号 (2023 年)、第 29 号 (2024 年)、第 30 号 (2025 年) に 3 年間の実施報告が掲載されており、PDF データで閲覧・保存が可能である。(https://www.ao-maibun.jp/book/kiyou_menu.html)
- 3) 国指定史跡の紹介を主体とした展示施設を有しているにもかかわらず、専門職が不在の市町村も存在している。
- 4) 青森県教育委員会文化財保護課の Web サイト「青森県内博物館等施設一覧」(更新日付：2025 年 6 月 17 日 https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-bunka/kennaihakubutukan_itiran.html) を加除修正したものである。(区分欄が空白の施設は、一覧表への記載がまだみられない施設である。また、今別町・大鰐町・鶴田町・大間町・風間浦村・田子町の施設に関する記載はみられない。)
- 5) 展示施設に勤務する方の談によれば、自分の住む地域に同様の施設が無いことを非常に悔しがると、残念がる他市町村からの来館者は少なくないとのことである。なお、博物館的な展示施設はその地域の住民だけが観るのではなく、その地域に赴任した他地域出身の教員が、その地域に関する情報を具体的に学ぶ場所でもある。そしてそこで学んだ知識がその地域の教育に活かされていくこととなる。よって、展示施設が無いことは、教育の幅を広げにくくしている可能性がある。
- 6) 西目屋村に考古資料を展示する施設は無いが、西目屋村中央公民館では、展示ケースを独自に準備し、青森県埋蔵文化財調査センターの「連携展示」を活用し、地域住民が常に地元の出土品を見学できるようにしている。
- 7) 詳細については、次の 2 編に記載されている。三宅徹也 1999「大平山元遺跡群の発見と発掘調査」『大平山元 I 遺跡の考古学調査』大平山元 I 遺跡発掘調査団、平尾勲・角鹿扇三・佐藤達夫 1960「甲地村長者久保出土の石器」『上北考古会誌』1
- 8) せっかくの「縄文ブーム」はこのような逆効果につながっている可能性がある。
- 9) 文化庁の Web サイト「全国の博物館」(<https://museum.bunka.go.jp/guide/>) 内にある「全国の博物館リスト」(MuseumList_20251225.xlsx) より作成。
- 10) 青森県は他県に比べ、資料の収集・保存・管理・調査・研究といった基本業務に時間をあまりかけない傾向があるが、これは登録博物館が少ないことと無縁ではないと思われる(博物館学の原理・原則が行政機関に普及していない可能性がある)。
- 11) 令和 5 年から配布開始された「文化財バトルカード」(八戸圏域文化財魅力発信事業 <https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/shakaikyoikuka/bunka/2/18845.html>) は、三八地域の市町村の連携により生まれた優れた取り組みである。
- 12) 県内各市町村の図書館に配備されているほか、交通・地域社会部 地域生活文化課の Web サイト「青森県史デジタルアーカイブシステム」(<https://kenshi-archives.pref.aomori.lg.jp/contents/kenshi-front/index.html>) を利用すれば、テキスト情報を素早く検索することができる。
- 13) 手作りの弓で鏃を装着しない矢(どちらも竹製)を 3m 飛ばした際、厚さ 20mm のウレタンマットと 3mm のベニヤ板に深く刺さる。
- 14) 白線は、完掘写真に画像ソフトで入れても良いが、影は撮影時に写し込む方が良い。
- 15) この画像の地図は、青森県教育委員会文化財保護課の Web サイト「青森県遺跡地図」(<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-bunka/isekitizu.html>) の PDF をつなぎ合わせて作成したものであり、「地元の縄文」再発見フェアで掲示したものである。
- 16) 青森県立郷土館で開催した「十腰内文化展」(会期：平成 17(2005)年度 12 月 9 日(金)～1 月 18 日(水))は、①十腰内遺跡の発掘→②6 つに区分される縄文時代→③縄文時代の環境変化→④後期の人々の暮らし→⑤後期の人々の心→⑥死者への想い→⑦皆の祈り→⑧後期から晩期へ→体験コーナー、文献コーナー、ビデオコーナーで構成し、主な遺物は、弘前市十腰内(2)遺跡出土土器(標式資料)・猪形土製品(重要文化財 愛称：いのっち)、六ヶ所村大石平遺跡出土土器・石器・土製品(重要文化財)、五戸町薬師前遺跡出土土器(重要文化財)、十和田市大不動出土注口土器(重要文化財 東京国立博物館所蔵)、八戸市葦窪遺跡出土狩猟土器(県重宝)、遺構は、平川市堀合遺跡出土石棺墓(実大復元)という、やや贅沢な内容であったが、最高の興味を示したのが「⑥死者への想い(人骨、複顔縄文人、土器棺、石棺墓)」で、次点が「③縄文時代の環境変化(気候変動に関するグラフ)」と「④後期の人々の暮らし(ムラ・家・器・食物・狩猟・漁撈)」であった。著名な資料や重要な資料、美しい資料よりも、自分たちの生活(人生)と関連する内容に高い興味をもつ。
- 17) この画像の A と B は、鈴木公雄 1988『縄文人の生活と文化』講談社 P47 のグラフを参考に作成、C は、阪口豊 1984「日本の先史・歴史時代の気候」『自然』中央公論社 P24 のグラフの一部をトレースしたものである。なお、「④後期の人々の暮らし」の食物のコーナーで用いた、いわゆる「縄文カレンダー」(小林達雄 1996『縄文人の世界』朝日選書 557 朝日新聞社 P111※初出は 1975「縄文人の生活」『図説ガッケン・エリア教科事典(VISUAL AREA) 第 1 巻 日本歴史』学習研究社 P21) も熱心に見学していた。また、現時点において参考となる気候関係の情報源としては、次の文献がある。中塚武監修 2020-21『気候変動から読みなおす日本史(全 6 巻)』臨川書店、中塚武 2021『酸素同位体比年輪年代法 先史・古代の暦年と天候を編む』同成社、中塚武 2022『気候適応の日本史 人新世をのりこえる視点』吉川弘文館、中川毅 2017『人類と気候の 10 万年史 過去に何が起きたのか、これから何が起ころのか』講談社ブルーバックス、中川毅 2024『時を刻む湖 7 万枚の地層に挑んだ科学者たち』岩波現代文庫 社会 351 岩波書店 (2015 年版は、岩波科学ライブラリー 242)

赤色塗彩された円筒下層式土器 —大鰐町大平遺跡の未報告資料—

岡本 洋*

大平遺跡は南津軽郡大鰐町大字長峰字杉浦平に所在する、縄文時代前期と平安時代の遺跡である。東北縦貫自動車道の建設に伴って昭和52・53年(1977・78)に青森県教育委員会が発掘調査を行い、報告書を刊行した(青森県教委編1980)。出土遺物は青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。同遺跡出土の円筒下層式土器には2点の赤色顔料付着土器が知られている¹⁾。

今回紹介する資料はそれらとは別個体で、円筒下層c～d1式に比定される台付鉢である。掲載外資料として保管されていた²⁾。内面が赤色の破片は11点あり、すべて同一個体とみてよい(写真2)。1片の内面に「78『大平』」の注記はあるが、出土位置を示す情報はない。口縁部片1点と底部付近の破片2点を図化し、赤色が確認される範囲と合わせて図1に示した。

1は口縁部で、自縄自巻縄文(R)または単軸絡条体第1類(R)が上下2段に押圧施文されている。端部は丸く収められている。体部には単軸絡条体第1類(R)が回転施文される。小片のため断定できないが、円筒下層式土器に一般的なバケツ形の深鉢よりも外側に開く器形であり、口縁は4単位の小さな波状となるようである。2・3は体部下半で、底部から体部にかけて開きながら立ち上がる。施文は単軸絡条体第1類(R)による。また、3の内側をみると体部から緩やかに底部に移行しており、その湾曲から考えて内面では底面中央がもっとも低くなることから、台が付く器形と考えるとよい。胎土は繊維を多く含みやや粗く、混和材は砂粒(石英・長石)のほか、直径5mm以下の小石が目立つ。なお、図示していないものも含め、どの破片にも二次的な火熱を受けた痕跡はない。

内面は口縁直下から体部下半にかけ濃淡のむらなく赤色(標準土色帖³⁾の10R5/6・赤色)で、赤色部分は土器本体を作った粘土の上に厚さ0.5mm程度の均一な厚みで確認できる(写真3)。赤色部分の表面に製作時のミガキ調整があるため、赤色に発色する粘土を焼成前に内面に塗り、装飾効果を持たせたものと考えられる。外面にも部分的に薄い赤色範囲が確認できる(2.5YR7/4・淡赤橙色;写真4)。土器自体の粘土とは別の、赤色に発色する粘土が焼成前に付着したものではあるが、計測できるほどの厚みを持たない。内面の状況とは明らかに異なるため装飾効果を狙ったものかどうかは不明である。

円筒下層式の赤色塗彩土器は、本例のほかは青森市三内丸山遺跡と外ヶ浜町中の平遺跡でそれぞれ1例が知られているだけで(児玉2025)、極めて貴重な資料である。

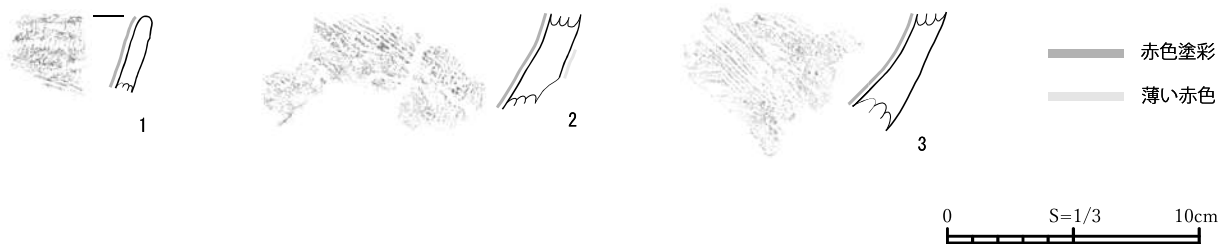


図1 大平遺跡出土の赤色塗彩土器

* 青森県埋蔵文化財調査センター

註

- 1) 報告書(青森県教委 1980) 248 図 46、253 図 76。
- 2) 児玉大成が実見しており、著書に記載がある(児玉 2025、125 ページ)。
- 3) 小山正忠・竹原秀雄(2001)『新版標準土色帖』23 版を使用。

引用・参考文献

青森県教育委員会編(1980)『大平遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 52

児玉大成(2025)『彩色土器の考古学的研究 —北海道・北東北における縄文時代中期～後期前半を中心に—』アクセス 21 出版

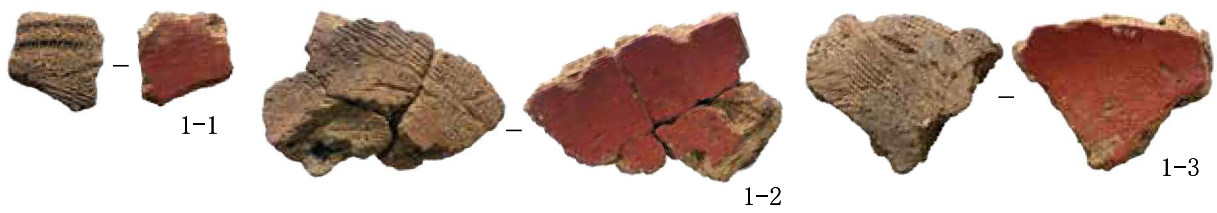


写真1 実測した破片



外面

内面

写真2 赤色塗彩土器



写真3 内面赤色塗彩の状況



写真4 外面の赤色範囲

青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 第31号

発行年月日 2026年3月11日

発行者 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL(017)788-5701 FAX(017)788-5702

印刷 川口印刷工業(株)青森営業所
〒030-0812 青森県青森市堤町二丁目1-7
堤町ファーストスクエアビル6F-C
TEL(017)721-6520 FAX(017)775-3510

BULLETIN
OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER
No.31

CONTENTS

Vase Shaped Pottery Related to the Daigi Type from the Middle Jomon Period —Focusing on the Introduction of Previously Unreported Materials	1
NAGASE Fumihito HATA Koujirou HASEGAWA Daiki	
Report on Previously Unreported Materials—Including Clay and Stone Artifacts —from the Chikano Site	13
HASEGAWA Daiki YAMAJI Yudai TAKAHASHI Akira	
Radiocarbon Dating of Late Jomon pottery in Aomori Prefecture(2)	29
KOBAYASHI Kenichi SATO Tomoo AIHARA Junichi	
Dissemination and Utilization of Archaeological Materials	43
KIMURA Takashi	
Red-lacquered Pottery in the Latter Half of Early Jomon Period—Unreported Materials from the Ōdai Site, Ōwani Town	59
OKAMOTO Yo	

March 2026

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER